

戦国六角記

湖国を揺るがした名門一族

清水修吾

目次

プロローグ	武士の台頭	7
第一章	六角の萌芽：兄弟の分水嶺	9
第二章	南北朝の嵐：南近江の死闘	14
第三章	観音寺城の落日：国人たちの反乱	25
第四章	鈎の陣	49
第五章	定頼の黄金期：湖国の繁栄と静かな衰退	91
終章	観音寺城の落城	95
エピソード	湖水は流転する	101
解説		102

湖水を染める旗・・・近江六角一族の軌跡

日本の大動脈・琵琶湖を擁する近江国。その南半国を支配した名族・六角氏は、いかにして鎌倉の御家人から守護大名、そして戦国大名へと成り上がったのか。同族である京極氏との長きにわたる暗闘、国人一揆による当主自害という絶望的危機、応仁の乱での下剋上、そして幕府軍を山中で翻弄した鉤の陣。五代にわたる当主たちの苦悩と決断をリレー形式で紡ぎ、中世の旧体制を破壊して戦国という新時代を切り拓いた一族の執念を描く歴史小説。

プロローグ 武士の台頭

現代の^{きぬがさわやま}繻山の山中。苔生した^{かんのんじじょう}観音寺城の石垣が、ひっそりと静まり返っている。木々の隙間から眼下を見下ろせば、日本の大動脈である琵琶湖が、陽光を受けて銀色に輝いていた。さざ波は静かに湖畔を打ち、まるで悠久の時を刻む時計の針のように響く。かつてこの地には、近江の南半国を支配し、京の都の^{のどもと}喉元を扼えた^{おさ}巨大な勢力が存在した。六角氏^{ろっかく}である。

鎌倉の御家人として勃興した彼らは、室町の動乱を生き抜き、やがて旧体制を破壊して戦国大名という新たな支配の形を真つ先に提示した先駆者であった。歴史の表舞台に立ち続けた数百年もの軌跡は、決して平坦なものではない。同族である京極氏との血を血で洗う暗闘、国人一揆による当主の非業の死、そして強大な幕府軍を翻弄した^{まがり}鉤の陣。彼らが近江の地に遺した凄絶な爪痕は、今も無言の石垣に深く刻み込まれている。

吹き抜ける風が、中世（鎌倉〜室町時代）から戦国（応仁の乱〜）へと向かう時代の激しい^{おとし}風へと変わる。湖水が血と泥に染まる幻影の中に、一族の祖である佐々木頼綱（1242〜1311）の姿が鮮明に浮かび上がった。

「我ら六角は、古き權威に縋るだけの腑抜けではない。一族が生き残るためならば、いかなる泥水をも啜^{すす}ろう」その重みのある落ち着いた声には、名門の分家という立場から身を起こし、京極を名乗る兄への複雑な情愛と強い対抗意識を抱えながらも、冷徹に現実を見据える武家らしい響きがあった。鎌倉幕府の黄昏をいちはやく感じ取った頼綱の決意こそが、独自の領国経営を模索する六角氏の強靱な礎となるのである。小波^{さざなみ}の音に重なるように、新たな時代を切り拓いた一族の執念の物語が、今ここに幕を開ける。



第一章 六角の萌芽…兄弟の分水嶺

春の兆しを孕んだ風が琵琶湖の水面を細かく揺らし、朝陽を受けた湖面は無数の黄金の鱗をきらめかせていた。湖東の平野には早くも緑の息吹が萌え出で、長い冬の終わりを告げている。葦の群れがざわめき、水鳥が甲高い声を上げて空へ舞い上がった。

古来より東国と西国を結ぶ要衝であった近江国は、東山道と東海道が交わり、人と物と権力が絶えず行き交う土地である。旅人や商人、武士の集団が泥にまみれた草鞋を引きずりながら、この豊饒な大地を踏みしめてきた。

その南近江をはるかに遠く見渡す高台に、佐々木頼綱は立っていた。宇多源氏（佐々木氏・六角氏・京極氏へと連なる武家の祖）の名門に生まれ、父・泰綱の四男として育った頼綱は、今や南近江の實質的支配者である。名門の重圧は並大抵ではないが、頼綱の背筋は揺らぐが、むしろその重さを己の骨肉に変えて立つ強靱さを漂わせていた。

引き締まった頬、底知れぬ光を宿す双眸、そして感情を大げさに表さぬ一文字の唇。風に乱れる髪を払う仕草にすら無駄がない。彼は、過去の武功や血筋の尊さに価値を見出さない。英雄伝説は酒席

の余興に過ぎず、彼が重んじるのは「明日を生き抜くための現実」だけであった。

鎌倉幕府が開かれて百余年。かつて武士を束ねた「御恩と奉公」の絆は軋み、蒙古襲来で身を削った御家人たちには恩賞が行き渡らず、所領を失い路頭に迷う者が続出していた。北条得宗家の専制は強まり、幕府の権威は内側から腐り始めている。

頼綱は都や鎌倉から届く情報を丹念に読み解き、市井の噂、物価、米相場、借財の額まで把握していた。それらを繋ぎ合わせたとき、彼の脳裏には「崩れゆく国家」の幻影が鮮明に立ち上がった。

「権威とは、いずれ地に墮ちるものよ」火鉢に書状をくべながら呟いた声には、嘆きも怒りもなく、ただ冷徹な覚悟だけがあった。

頼綱の宿所は、京都・頂法寺——六角堂のすぐ傍らにあった。六角形の本堂から響く鐘の音は、京の朝夕を告げる音として親しまれている。商人の荷車が行き交い、方言が飛び交う活気の中で、頼綱の館は質素ながら堅牢で、武士たちが隙なく配置されていた。

洛中の人々は、いつしか彼を「六角殿」と呼ぶようになった。頼綱はこの呼び名を否定せず、むしろ新たな家名として受け入れようとしていた。

佐々木という大木は枝葉を広げすぎ、大原・高島・朽木・京極と分家が増え、内部の統制は困難を極めていた。「佐々木」という看板は、もはや栄光ではなく、過去のしがらみに縛られる呪縛に近い。

頼綱は決断した。古き名を捨て、「六角」という新たな器に未来を託すと。

しかし、その決断は兄・佐々木氏信との対立を避けられぬものとした。氏信は京極坊に壮麗な館を構え、幕府中枢との結びつきを強め、中央政界での地位向上に執着していた。

北近江を地盤とする京極氏と、南近江を掌握する六角氏。同じ血を分けた兄弟が、一国の中で異なる未来図を描きながら睨み合う異常な状況である。

春の夕暮れ、頼綱は兄の館を訪れた。檜皮葺の屋根、手入れの行き届いた庭園、高価な香の匂いが漂う書院。そこに座す氏信は、豪華な直垂をまとい、自信と権力を纏った表情で弟を迎えた。

「頼綱よ、よく参った。酒でも飲もうぞ」

「兄上、今日は酒の席ではござらぬ。近江の国衆の動き、そして佐々木の行く末について申し上げたく参りました」

氏信の笑みが消えた。

「近頃、南近江の国人どもを甘やかしておると聞くが」

「甘やかしてはおりませぬ。彼らの力を軽んじれば、いずれ我らの足元が崩れましょう」

「地侍や悪党と馴れ合い、幕府の法を曲げるのが手立てか。我らは鎌倉殿の御家人、近江の守護ぞ。法と権威をもって押さえつけるが道理よ」

頼綱は静かに首を振った。「兄上、鎌倉の風はもはや追い風ではござらぬ。御家人は困窮し、所領争いは裁かれず、民も国人衆も、遠い鎌倉の沙汰を待つてはおりませぬ。求められているのは、この地で争いを治める『実力』にござる」

氏信の眉が動いた。「幕府を軽んじる気か。それは謀反の萌芽ぞ」

「謀反ではござらぬ。ただ、生き残るための現実を見据えているだけ。南近江は物流と水運の要。商人、馬借、舟運、地侍——彼らを味方につけねば国は治まりませぬ」

兄弟の対立は、思想の断絶であった。中央の権威に寄り添う兄と、在地の力を束ねようとする弟。交わらぬ二つの道が、近江の中で致命的に交差しようとしていた。

鎌倉幕府の衰退は、近江では「悪党」の跳梁という形で現れた。彼らは単なる盗賊ではなく、旧来の権威に従わず武力と経済力で実力行使に出る在地勢力である。年貢を拒否し、代官を襲撃し、関所を設けて通行税を徴収する。南近江から伊賀、湖岸の湊町に至るまで、悪党の活動は活発化していた。

ある日、延暦寺領の莊園で国人衆が年貢を横領し、使者を追い返したとの報が入った。延暦寺は幕府に訴えたが裁定は下りず、僧兵が山を下りるとの噂が広がり、南近江は一触即発の緊張に包まれた。老臣は進言した。

「殿、ここは鎌倉の下知を待つべきにござります。延暦寺を敵に回せば無傷では済みませぬ。かといって国人衆を討てば、地侍どもの反発は必定。静観こそ上策かと」

頼綱は首を振った。

「鎌倉の裁定を待てば、南近江は戦火に包まれる。田畑は荒れ、民は逃げ惑い、街道も水運も途絶える。六角の基盤も共に崩れよう。我が庭先で他者が火を放つことは許さぬ」

頼綱は精銳数百騎を率い、紛争の地へ急行した。延暦寺の僧兵と国人衆が対峙し、怒号が飛び交い、血が流れようとしたその瞬間――。

六角の軍勢が風のごとく割って入った。

「佐々木四郎頼綱である！双方、武器を取めよ！」

六角の旗が激しく翻り、統制の取れた武士たちが槍先を向ける。その威圧に、僧兵も国人衆も動き

を止めた。

頼綱は単騎で両軍の間に進み出た。

「問う。ここで血を流し、田畑を荒らして何が残る。仏の道を説く者が民を殺め、土に生きる者がその土を血で穢す。それが貴殿らの正義か」

「鎌倉の裁定は遠い。だが、六角の刃はここにある。従わぬ者は、近江の守護たる私が討つ」

その声は大きくはなかったが、場の空気を凍らせる力を持っていた。

やがて、国人衆の一人が武器を落とし、僧兵たちも長刀を収めて山へ引き返した。

頼綱は一滴の血も流さず紛争を鎮めた。だが、真の戦いはこれからである。武力だけでは不満は再び噴き出す。頼綱は国人衆の長を呼び出し、密室で膝を突き合わせた。



第二章 南北朝の嵐…南近江の死闘

冷たい比叡おろしが、日本の大動脈たる琵琶湖の湖面を撫でるように吹き抜け、鉛色の水面には無数の白波が立っていた。うねる風の音は、まるでこの時代そのものが発する低く重い呻きうめのようでもあった。

時は南北朝の動乱期（1330～1392）。後醍醐天皇の掲げた建武の新政は武士たちの失望のうちに脆く崩れ去り、足利尊氏は新たな武家の棟梁として覇権を握らんとしていた。天下は吉野と京都、二つの朝廷を戴き、昨日まで肩を並べて戦った者が今日は敵として刃を交える。血で血を洗う果てしない戦乱の影は、この近江の地にも重く垂れ込めていた。

南近江の野に張られた六角軍の陣営は、数日前の冷たい雨により深い泥濘ぬかるみと化していた。湿った土の匂い、生暖かい馬の獣臭、兵の癒えぬ傷から漂う血と化膿の匂いが混ざり合い、陣中にはむせ返るような空気が立ち込めている。くすぶる篝火の煙は灰色の空へと吸い込まれ、そのただ中を、草摺を泥に汚しながら歩む一人の武将の姿があった。六角氏頼である。

佐々木一族の名門、六角氏の当主である氏頼は、派手な装飾を一切排した黒糸織おぢしの鎧を身にまとい

ていた。実戦のみを想定した堅牢な造りで、前線の泥にまみれたその姿は、一見すれば名のある武将とは思えぬほど無骨であった。氏頼は黙々と陣を見回り、疲労の色が濃い兵たち一人一人に声をかけていく。

「傷の具合はどうだ。顔色が優れぬようだが、無理をするな。手当ての布が足りぬなら、本陣から持たせよう」

膝をつき、深い切り傷を負った若い足軽の目を見て語りかけると、足軽は恐縮しながらも安堵の色を浮かべた。

「はっ……もったいなきお言葉。これしきの傷、すぐに塞がりましたよ」

「兵糧は足りておるか。夜の冷えは厳しかろう。何かあれば遠慮なく申し出よ。腹が減っては戦はできぬし、冷えは万病の元ぞ」

その口調は、近江守護という高い地位にある者とは思えぬほど気さくであった。氏頼の言葉には、上から見下ろすような傲慢さは微塵もない。兵たちは皆、主君の実直な人柄を知り尽くしており、深く頭を下げる者、泥まみれの手で涙を拭う者が絶えなかった。氏頼が歩み去った後には、沈んでいた陣の空気が、微かながら温もりを帯びるのだった。

しかし、氏頼の内面には、穏やかな振る舞いとは裏腹に、深い葛藤が渦巻いていた。陣を一巡りして陣幕に戻り、床几に腰を下ろすと、兜を脱いだ氏頼は重いため息を吐いた。兜の重みから解放されても、肩にのしかかる見えない重圧は消えない。額の汗を拭いながら、脳裏に浮かぶのは、同じ佐々木一族でありながら全く異なる道を歩み、今や時代の寵児として輝く男の姿であった。北近江を治め

る京極氏の当主、京極道誉である。

陣幕の隙間から北の空を望む。あの空の下には、道誉が率いる京極軍の陣があるはずだった。風の噂によれば、道誉の陣は血生臭い戦場にあっても信じ難いほど豪奢を極めているという。金糸銀糸で彩られた巨大な陣幕、異国の豹皮をあしらった奇抜な甲冑、夜になれば極上の酒と白拍子を集め、猿楽や連歌の宴を催す——。既存の権威や常識を鼻で笑い、己の美意識のままに振る舞う「婆娑羅」の体現者。それが京極道誉であった。

氏頼は、泥に塗れた自らの手を見つめた。六角氏は佐々木一族の嫡流格として、一族を束ねる立場にあった。初代・佐々木頼綱が六角堂を拠点に南近江へ地盤を築いて以来、六角氏は堅実に領国を治め、民の暮らしを守り、幕府御家人としての本分を愚直に果たしてきた。

だが今、幕府の中枢で圧倒的な権勢を振るうのは六角ではなく、分家筋の京極道誉である。道誉は政治的才覚と権謀術数によって幕府の中枢に食い込み、尊氏からの寵愛も厚い。政所や評定衆には京極の息がかかった者が並び、建武の新政から足利への鞍替えも鮮やかであった。華やかで機知に富み、時代の風を読むことに長けた道誉。彼と比較されるたび、氏頼は自らの生真面目さが時代遅れの遺物のように思えてならなかった。

「……それがしは、不器用な男だ」

誰もいない陣幕で呟いた言葉には、焦燥と劣等感が滲んでいた。華やかさでも政治の駆け引きでも道誉には勝てない。ならば六角は、京極の光の前に影を落とし、歴史の表舞台から消えるしかないのか——。その問いが氏頼を夜ごと苦しめていた。

数日後、軍略上の必要から六角軍と京極軍が合流し、軍議が開かれることとなった。氏頼が京極軍の陣を訪れると、そこは戦場とは思えぬ異様な空間であった。足元には砂が撒かれ、紅白の幕が風に揺れ、香炉からは沈香や伽羅の香りが漂う。鎧掛けに飾られた甲冑は奇抜な色彩を放ち、実用性よりも美観を優先していた。

「おお、六角の氏頼殿ではござらぬか」

床几の上から響く声。京極道誉である。唐錦の直垂をまとい、金銀の扇を手にしたその姿は、戦場の空気とはまるで異質であった。

「道誉殿、芝居がかった挨拶は無用にて」

氏頼が感情を抑えて返すと、道誉は扇を閉じ、氏頼を頭の前から足袋まで眺め回した。

「相変わらず堅物よな。兜の緒はきつく締められ、鎧には泥がこびりついておる。佐々木嫡流の心がけ、誠に立派よ。だが、窮屈そうにも見えるがの」

称賛を装いながらも、揶揄と憐憫が混じる声。氏頼の眉がわずかに動く。

「戦場で鎧が泥に汚れるは当然。将が泥を避ければ、兵は血を流すことを躊躇う。兵が命を懸けている時に、将が香を焚き錦を着飾って何とする」

氏頼の反論に、道誉は楽しげに笑った。

「武士の本分、とな。氏頼殿、そなたはまだ古き幻影に囚われておる。今の世に必要なのは、古臭い忠義ではなく、人を惹きつける『力』と『華』よ。幕府の権威も、この直垂と同じ。美しく輝けば人はひれ伏すが、泥にまみればただの布切れだ」

道誉は一步近づき、声を低めた。

「そなたは盤上の泥ばかり見て、天下の大きなうねりを見失っておる」

氏頼は唇を噛んだ。道誉の言葉は腹立たしいほどの射ていた。足利政権は新たな権威を必要としており、道誉はそれを婆娑羅という形で演出している。力と華——武士たちが渴望するもの。それに比べ、自分は領内の騒ぎを地道に鎮めるだけ。返す言葉がなかった。

「六角は六角の道を行く」

絞り出すように告げ、氏頼は踵を返した。背後から道誉の嘲笑が聞こえたが、振り返らなかった。陣を出た瞬間、泥の匂いが鼻を満たした。その匂いが、今の氏頼には不思議と落ち着くものに感じられた。

京都・室町の幕府中枢は道誉の独壇場であった。尊氏（兄）と直義（弟）の二重構造という矛盾を抱えた政権は、やがて観応の擾乱へと発展するが、道誉はその危険な潮流を巧みに泳ぎ切っていた。花の御所の宴では尊氏の傍らに座り、公家や高僧とも対等に渡り合い、連歌の会では文化人と肩を並べた。誰もが道誉の機嫌を損ねまいと必死であった。

一方、氏頼はその場に馴染めなかった。華やかな衣装に身を包み、雅な言葉遊びの裏で冷酷な取引を行う者たちの中で、実直な氏頼は浮いてしまう。広間の隅で猪口を傾けるばかりで、気の利いた冗談も返せない。

「六角殿は相変わらず仏頂面でござるな」

道誉に取り入る小役人が揶揄してきたが、氏頼は静かに返した。

「都の華やぎより、近江の土の匂いの方が性に合っております」

その眼差しには揺るぎない拒絶があった。

道誉は宋の茶器について公家と談笑していた。その姿は輝くようでも、氏頼の胸には黒い感情が広がった。なぜ自分はあるののように振る舞えないのか。六角の当主として誤った道を歩んでいるのではないか。道誉の言う通り、天下を動かすには華やかさが必要なのか。

だが同時に、都の華やぎは致命的に空虚だとも感じていた。彼らが酒を飲み連歌を詠む間にも、地方では血みどろの争いが続き、農民は重税に苦しんでいる。幕府の権威など、都を一步出れば脆く崩れ去る。道誉の「力」と「華」は、一時の熱狂を生むだけで、大地に根を張る強さにはなり得ないのではないか。

「……私の居場所、ここではない」

氏頼は席を立ち、花の御所を後にした。夜風が火照った顔を冷やす。空には冴え冴えとした月が浮かんでいた。向かうべき場所は、都の幻影ではなく、泥にまみれた近江の地であった。

観音寺城に戻った氏頼を待っていたのは、都の宴とは正反対の、泥臭く現実的な領国経営であった。南近江は琵琶湖を擁し、東国から京へ向かう交通の要衝であるため、独立心の強い国人衆が多く存在した。蒲生郡、甲賀郡、伊賀に接する山間部など、複雑な地形に根を張る彼らは、自らの土地を守るためならいかなる権威にも屈しない。

建武から室町へと時代が移る中、国人衆の不満は頂点に達していた。幕府は戦費調達や恩賞確保のために重税を課し、所領接収を試みた。特に京極道誉の息がかかった代官たちが高圧的に税を取り立

てたことが火に油を注いだ。

ある日、観音寺城に有力国人たちが怒り心頭で乗り込んできた。蒲生高郷がもうたかさとが進み出て声を荒げた。「守護様！幕府のやり口はもう我慢の限界にごさる！」高郷の背後には、武力蜂起も辞さぬ覚悟を秘めた国人たちが控えていた。

家臣たちは刀に手をかけたが、氏頼は静かに制した。氏頼は上座から降り、国人たちと同じ板の間に立った。「高郷殿、その方らの怒り、尤もである。幕府の沙汰は強引に過ぎる。それがしも深く憂慮しておった」高郷は意外そうに目を見開いた。

「だが、ここで武力に訴えれば、幕府への反逆となる。近江は戦火に焼かれ、民が塗炭の苦しみを味わう。それだけは避けねばならん」

氏頼は一步前へ出た。「それがしが身を挺して幕府に掛け合おう。京極の代官の暴挙は、名と命に代えても取り消させる。その代わり、軽拳妄動は慎んでほしい」

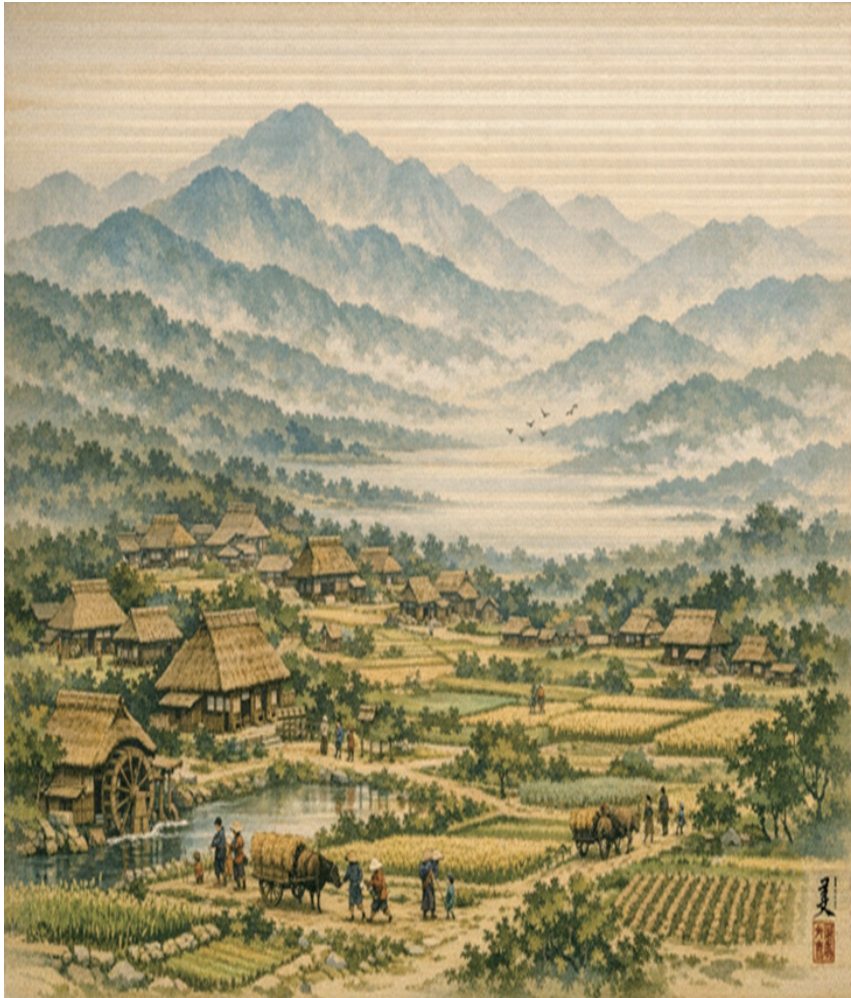
高郷は戸惑った。「……守護様は本気でござるか？最悪、守護職を解かれるやもしれませぬぞ」

氏頼は静かに笑った。「それがしの立場などどうでもよい。六角の当主である前に、この近江の地を預かる者だ。都の都合で近江の民が踏みにじられるのを見過ごすわけにはいかぬ」その言葉に嘘はなかった。国人たちは武器を下ろし、深く頭を下げた。

数日後、氏頼はわずかな供回りだけを連れ、蒲生郡の代官所へ赴いた。代官は京極の威光を笠に着て横柄に振る舞ったが、氏頼は一步も引かなかった。

「この地は水利が複雑で、軽々に寺社領とすれば争いが起きる。やがて一揆となり、東国からの兵糧

第二章 南北朝の嵐…南近江の死闘



道が断たれる」

氏頼の氣迫と、現地事情に立脚した理路整然たる反論の前に、代官はついに言葉を失った。やがて彼は観念したように深く息を吐き、検地の中止と所領の安堵を認めざるを得なかった。

この一件は、南近江の国人衆の間に瞬く間に広まった。

「六角氏頼様は、我らのために京極と幕府を退けた」

「己の保身よりも、近江の土を選んだ。あの方は、我らと同じ土地に生きる者だ」

その噂は風に乗って広がり、国人衆の心に深く刻まれた。

この日を境に、氏頼の領国経営はさらに泥臭く、しかし確かなものへと変貌していった。彼は華やかな書状や威圧的な触れ書きで命令を下すことを好まなかった。問題が起きれば自ら馬に跨がり、国人の館へ赴いた。境界争いや水争いが起きれば、代官の報告書を見るだけでなく、自らその土地を歩き、泥に足を取られながら検分を行った。

ある時は、村の用水路の配分を巡る争いに立ち会い、泥水に浸かりながら杭を打ち直して見せた。夜になれば国人や村の長と囲炉裏を囲み、近江の地酒を酌み交わし、猪肉を喰らいながら、土地の歴史や民の暮らし、次の収穫の見通しについて語り合った。「六角の強さは、飾られた権威ではない。この地に生きる者たちの、泥に塗れた執念にござる」

ある夜、囲炉裏の火に照らされながら、国人の一人が尋ねた。「守護という高いお立場でありながら、なぜそこまで我らに寄り添われるのか」

氏頼は杯を見つめ、静かに答えた。

「それがしは、この近江の土に生かされておる。ならば、この土に生きる者たちを守るのが務めよ」
その言葉は、飾り気のない真実として国人たちの胸に響いた。

氏頼は確信しつづであった。

京極道誉が幕府の中樞で築いているのは、華やかで絶対的な権力構造である。しかしそれは、利益の分配が滞れば一瞬で崩れ去る砂上の楼閣でもあった。

対して自分が近江で築こうとしているものは、泥に足を取られながらも、土地と民に根ざした揺るぎない基盤である。

それは華やかさとは無縁だが、乱世を生き抜くための確かな力となるはずだった。

やがて、南北朝の争乱はさらに激しさを増し、観応かんのうの擾乱じょうらん（1350～1353足利尊氏 VS 足利直義）が京の都を揺るがす中、六角氏頼の名は近江一帯で確かな信頼とともに語られるようになっていく。

「六角殿は、泥にまみれた守護よ」

「だが、その泥こそが我らを守ってくれる」

国人たちの言葉は、氏頼の歩む道が間違っていないことを示していた。比叡おろしが吹き荒れる冬の夜、観音寺城の天守から琵琶湖を望みながら、氏頼は静かに目を閉じた。都の華やきは遠く、ここには泥と風と、民の息遣いがある。

「六角は六角の道を行く。たとえ泥にまみれようとも、この地を守り抜く」その決意は、冷たい風の中で揺らぐことなく、静かに燃え続けていた。



「観音寺城の山城の威容を今に伝える石垣」

第三章 観音寺城の落日…国人たちの反乱

豊穰なる近江の国は、秋の深まりとともに一面の黄金色の輝きに包まれていた。日本の中心に横たわる巨大な水鏡、琵琶湖の湖面は穏やかなさざ波を立て、西日に照らされて無数の光の粒を明滅させている。湖の上を行き交う丸子船の白い帆が風をはらみ、大津や坂本といった湊に向けて京の都へと運ばれる豊かな物資を満載して進む光景は、この地がいかに天下の富の集積地であるかを雄弁に物語っていた。

湖畔には青々とした葦が群生し、水鳥たちが羽を休め、遠くには比叡や比良の山々が紫がかった影を落としている。古来より交通の要衝であり、東西を結ぶ大動脈であるこの近江を制する者は、天下の動向を左右するだけ



の實力を握ることになる。

その広大な湖水を見下ろすように、南近江の平野部から屹立する叡山の頂きに、堅牢にして壮麗なる山城がそびえ立っていた。近江国南半国を支配する守護大名、名門佐々木六角氏の居城たる観音寺城である。山の斜面には自然の地形を巧みに利用しつつ幾段にも重なる石垣が組まれ、その上にそびえる白壁の櫓や豪華な御殿が、鬱蒼と茂る木々の間から威容を誇っている。

かつて鎌倉の御家人から身を起こし、室町の動乱を幾度もくぐり抜けてきた佐々木一族の頂点にふさわしい、權威と繁栄の象徴であった。城下には商人や職人が集う町が形成され、街道を行き交う旅人たちは皆、山の上に君臨する六角家の威光に恐れ入りながらその前を通り過ぎていった。

室町時代中期、六角氏の権勢はかつてないほどの高みに達していたように見えた。足利將軍家の下で近江守護の地位を盤石なものとし、京の都にもほど近いこの水陸の要衝を支配する彼らは、政治的にも経済的にも強大な力を有していた。しかし、外から見るその壮麗な威容とは裏腹に、城の内部、そして六角氏の統治の根幹には、深く静かな腐敗の病魔が巢食い始めていたのである。何世代にもわたって守護という地位に安住してきたことで、彼らは自らの足元を支えている大地そのものから目を背けるようになっていたのだ。

観音寺城の本丸、最高級の檜がふんだんに使われ、金碧の障壁画で彩られた豪華な広間の中央には、現当主である六角満綱が上座にどっしりと座っていた。彼は伝統と格式を何よりも重んじる、生粋の守旧派であった。

身に纏う直垂は西陣で織られた最高級の絹であり、微動だにするたびに衣擦れの音が静寂な空間に

心地よく響き渡る。満綱のふくよかな顔には、名門佐々木嫡流の当主としての揺るぎない誇りと、何者にも脅かされることのない権力者特有の余裕が張り付いていた。彼にとつて、世界とは自らを中心にして回るべきものであり、秩序とはすなわち彼自身の意志そのものであった。

「此度の秋の収穫、例年にも増して豊作であるとの報告、大儀であった。各郡の代官どもには、定められた年貢の徴収を滞りなく行うよう、厳命を下しておけ。京の室町殿への献上品も、決して粗相のあつてはならぬからな。我が六角家の面目に関わることぞ」満綱の言葉は、古風で格式張った言い回しであり、その音声には絶対的な威厳がこもっていた。

下座に平伏する重臣たちは、息を殺して当主の言葉を聞き入っている。彼らにとつて満綱の命令は天の声であり、それに異を唱えることなど思いもよらないことであった。いや、正しくは、異を唱えることの無意味さと危険性を熟知しているがゆえに、誰もが耳障りの良い言葉だけを並べ立てるようになっていたのである。

満綱の隣には、彼と同じく名門の誇りを骨の髄まで刻み込まれた嫡男、六角持綱が控えている。持綱もまた、父の威光を傘に着て、次期当主としての己の立場にいささかの疑いも抱いてはいなかった。彼の身なりもまた父に劣らず華美であり、その眉目秀麗な顔立ちには、常に領民を見下すような冷やかな光が宿っていた。

「父上のお言葉の通り。我ら佐々木の血脈こそが、この近江の地を鎮め、幕府の屋台骨を支える柱石にござります。近頃、郷村の土民や地侍どもが、年貢の軽減や労役の免除などを求めて直訴に及ぶなどという不届きな動きがあると聞き及んでおりますが、そのような下郎の戯言、一切耳を貸す必要は

ありませぬ。力をもって押さえつけ、守護たる我らの威光の前に平伏させるのが道理というものでござりましょう」

持綱の言葉には、領民に対する冷酷なまでの無関心と、身分秩序に対する強烈なまでの執着が表れていた。彼にとって民衆とは、自らの華やかな生活と権威を維持するための道具に過ぎず、それ以上の意味を持つ存在ではなかった。満綱は満足げに深く頷き、手に持った見事な絵描きの白扇をゆつくりと手の中で弄んだ。

「その通りよ、持綱。我ら六角家は、はるか昔よりこの近江の地を任されてきた由緒正しき家柄である。かつて先祖たる頼綱公が六角堂を宿所としたことから六角を称し、この地に根を下ろした。そして氏頼公が南北朝の動乱において足利の御所様にお味方して幾多の武功を立ててよりこのかた、我らの権威は天より授かりし不拔のもの。地を這う虫けらどもが、天の理に逆らうことなど許されるはずもないのだ」

満綱の脳裏には、過去の栄光ばかりが黄金色に輝いていた。歴代の將軍から賜った感状や、公家たちとの華やかな交際、名門としての格付け。そうしたものが自らの力の源泉であると固く信じていた。しかし、彼は致命的なことを見落としていた。かつて、南近江の基盤を固めた偉大なる先達、六角氏頼が、いかにして国人衆と呼ばれる在地領主たちと泥臭い信頼関係を築き上げてきたかという歴史の真実をである。

氏頼の時代、六角氏は決して今のようにお高く止まった存在ではなかった。北近江を支配し、幕政の中枢で「婆婆羅」の限りを尽くして栄華を極めていた同族の京極道誉に対し、氏頼は深いコンプレッ

クスと焦燥感を抱えながらも、決して華美な振る舞いに逃げることはなかった。

彼は自ら馬に跨り、粗末な具足を身につけ、土にまみれて南近江の国人たちと肩を並べて戦場を駆け抜けた。戦が終われば、彼らと車座になって酒を汲み交わし、その痛みや喜びを分かち合った。その血と汗の代償として得られた「近江の土と民との結びつき」こそが、北の京極氏の権謀術数に対抗し得る、六角氏の真の強さの源泉であったのだ。

しかし、時が流れ、戦乱が小康状態を保ち、世代が交代するにつれて、その泥臭い結びつきは「当然の服従」へと変質していった。室町幕府の守護大名という、中央から与えられた権威の衣を分厚くまとこううちに、六角氏の当主たちは自らが近江の豊かな土から切り離され、雲の上に住む超越的な存在であると錯覚するようになってしまったのである。先祖が流した血の重みは忘れ去られ、残されたのは空虚な格式だけであった。観音寺城の麓、南近江の広大な平野や山間部では、満綱たちが見ようとならない、あるいは見下して省みない現実が、静かに、しかし確実に激しい胎動を始めていた。

この時代、農業技術の進歩は村落の風景を一変させていた。二毛作が普及し、水車を用いた灌漑設備が整えられ、貨幣経済が農村の隅々にまで浸透しつつあった。それに伴い、村落の構造もまた劇的な変化を遂げていたのである。

名主や地侍を中心とした農民たちは、単なる領主の支配下にある従属民であることをやめ、自らの生活と土地を守るために「惣村」と呼ばれる強固な自治組織を形成し始めていた。彼らは鎮守の森の宮座に集まり、寄り合いを開いて掟を定め、水利権や山野の利用権を自ら管理した。そして時には自ら武装し、外敵や盗賊から村を命がけで守り抜いた。



「彼らにとって真の主君とは、遠く離れた京の都で権勢を振るう将軍でもなければ、山の上から高圧的に命令を下し、重税を取り立てるだけの守護大名でもなかった。彼らが魂を懸けて守るべきは、先祖代々受け継いできた己の土地と、苦楽を共にする村の仲間たちだけであつたのだ。」

そうした自立心を強める国人衆や土豪たちにとって、昨今の六角氏の振る舞いは到底受け入れがたい、理不尽の極みであつた。幕府の権威を笠に着た守護代や代官たちは、事あるごとに武装した手下を引き連れて村々へ乗り込み、過酷な年貢の取り立てを行つた。それに加えて、段銭や棟別銭といった名目をつけた臨時税を容赦なく課し、少しでも反抗する者があれば容赦なく牢にぶち込むか、家財を没収した。

さらには、観音寺城の壮麗な石垣の普請や、京から招いた公卿たちをもてなすための豪華な接待費用の負担、果てはそのための労役までが頻繁に課せられた。民衆の生活は限界に達し、娘を遊女として売り飛ばす者や、夜逃げをして田畑を捨てる者が後を絶たなかつた。

秋の夜長、南近江の有力な国人衆の一人である山内家の広々とした屋敷では、近隣の地侍や惣村の代表者たちが密かに集まり、会合が開かれていた。窓には分厚い板戸が立てられ、外に声が漏れないように厳重な警戒が敷かれている。部屋中央に切られた囲炉裏の火が、彼らの日焼けして皸よぼの刻まれた険しい顔を、不気味なほど赤く照らし出していた。

「またしても、守護所から新たな税の触れ書きが届きおつた。今度は京の建物の修繕費用だという。ふざけるのも大概にせよ！我らの血と汗の結晶である米を、なぜ見ず知らずの公家どものために差し出さねばならんだ！」一人の若い地侍が、怒りのあまり拳を激しく畳に叩きつけて激昂した。その

声には、長年溜め込んできた理不尽への怒りと、家族を飢えさせることへの絶望が入り交じっていた。彼の言葉に、周囲の男たちも重々しく頷き、ギリギリと歯ぎしりをする音が部屋に響いた。

「六角の御屋形様は、我らの苦しみなど微塵も理解しておられぬ。昔の氏頼公の御代には、少なくとも我らの言い分に耳を傾け、戦では共に槍を握って先陣を切る度量がおありだった。だからこそ我らも命を預けたのだ。だが、今の満綱公や持綱殿はどうだ。我らをまるで牛馬のごとく見下し、果汁を絞り取るように富を奪うことしか考えておらぬではないか」

年配の国人が、深い溜め息とともに言葉を継ぐ。彼の目には深い悲哀が宿っていた。彼らの心の中では、六角氏に対する敬意や忠誠心は、度重なる裏切りと搾取によってとうの昔に枯れ果てていた。残っているのは、自らの生存を脅かす存在に対する激しい憎悪と、いつかこの重い軛くひまきを断ち切つてやるといふ暗く熱い情熱だけであった。

「もはや、我慢の限界だ。これ以上耐え忍べば、我らの村は滅びる。我らは惣村の掟に従い、一揆を結んで守護に立ち向かうべきではないか。甲賀や伊賀の谷に住む者たちも、六角の専横には不満を極限まで募らせていると聞く。彼らの持つ特異な戦の技と手を結べば、さしもの観音寺城とて揺るがすことができよう」

若き地侍の口から、ついに最も危険な提案が飛び出した。一揆。それは権力者に対する究極の反抗であった。守護大名に刃向かうことは、すなわち幕府の権威そのものに対する反逆を意味し、失敗すれば一族郎党ごとく首を刎ねられるという大博打である。部屋に一瞬、重苦しい沈黙が落ちた。しかし、囲炉裏の炎を見つめる男たちの目に宿る決意の光は、その死への恐れを焼き尽くすほどに熱



く、確固たるものとなっていたのである。

彼らのこの燻る不満の炎に、巧妙に油を注ぎ、取り返しをつかない大火へと育て上げようとする黒い影が、北の地からひそかに忍び寄っていた。それこそが、六角氏と数百年にわたって血を洗う因縁の対立を続けてきた同族、北近江の支配者である京極氏であった。

かつて、華美な婆婆羅の振る舞いで天下の耳目を集め、足利尊氏の側近として権勢をほしいままにした京極道誉。既存の権威や常識を嘲笑い、己の才覚と冷徹な権謀術数のみで乱世の荒波を泳ぎ切ったその恐るべき血脈と精神は、現在の京極家当主である京極持清（1407～1470）にも色濃く、そしてより洗練された形で受け継がれていた。

持清は、幕府の中枢である侍所頭人などの要職を歴任する当代きつての実力者であり、常に南の六角氏の動向を冷ややかに、そして執拗に監視していた。彼にとって、南近江という天下有数の豊かな土地を不当に抑え、佐々木嫡流を自称してふんぞり返る六角氏は、目障り極まりない存在であった。六角を排除し、近江一国を自らの手中に収めること。それは京極氏にとっての悲願であった。

北近江の京極館の奥深く、外の光がほとんど届かない薄暗い書院の中で、持清は見事な羽並みを持つ一羽の鷹を左腕に止まらせながら、密かに放っていた配下の密偵からの報告に耳を傾けていた。

「南近江の国人ども、いよいよ六角に対する不満を爆発寸前まで溜め込んでいる様子。特に野洲川流域の山内衆や、甲賀の地侍どもの間では、一揆の企てが公然の秘密として語られるようになっております。もはや、いつ火の手が上がってもおかしくない状況にござります」床に平伏した黒装束の密偵の言葉に、持清の薄い唇の端がわずかに吊り上がった。その冷酷な笑みは、畏にかかった獲物を高み

から見下ろす捕食者のそれであった。彼は鷹の鋭い嘴を指先でなぞりながら、静かに口を開いた。

「愚かなことよ。満綱の奴め、己の足元が腐り落ちようとしていることにすら気づいておらぬとはな。守護という幕府から与えられた肩書きだけで人が傳かく時代など、とうの昔に終わっているというのに。旧き権威の衣にすがりつく哀れな老いぼれめ。自らの領民の心すら掴めぬ者が、近江を統べる資格などあるはずもない」持清の言葉には、同族への憐憫などは微塵もなく、ただ冷徹な政治的計算だけが働いていた。彼は鷹を止まり木に移すと、密偵に向かって鋭い眼光を向けた。

「よいか。南近江の国人どもに、さらに強く、そして甘く働きかけよ。北の京極が、彼らの正当なる蜂起を密かに後押ししてやるとな。六角を追い落とし、我らが南近江の実質的な支配権を握った暁には、彼ら惣村の既得權益を全面的に認め、長年苦しめられてきた年貢や諸役を大幅に減免すると約束してやれ。もちろん、書状には決して我が名を残すな。あくまで密かな口上として、彼らの欲望と怒りを煽り立てるのだ」

「ははっ。御意のままに。必ずや、彼らの背中を押してご覧に入れます」

「それと……幕府の要人たちへの工作も怠るな。六角満綱が領国経営に著しく失敗し、近江の地を大いに乱しているという噂を、京の都のあちこちに広めるのだ。管領家や政所にも手を回せ。いざ一揆が起きた時、幕府が六角を見捨て、一切の援軍を送らぬように仕向けておく必要がある。満綱には、孤立無援の地獄を味わってもらわねばならんからな」

持清の策は、緻密にして悪魔的なまでに冷酷であった。彼は自らの兵を動かして六角氏を直接討つのではなく、六角氏が自ら育て上げた領内の不満分子を利用して内部から崩壊させるといふ、最も安

全で、かつ相手にとって最も残酷な方法を選んだのである。京極道誉がかつて見せた、既存の秩序を内側から食い破る婆婆羅の精神は、華美な振る舞いから陰湿な謀略へと形を変え、見事に機能し始めていた。

京極の密偵たちは夜の闇に紛れて南近江の各地を駆け巡り、国人衆の有力者たちと次々に接触を図っていた。彼らが持参した甘い約束は、過酷な搾取に苦しみ、蜂起の決断に躊躇していた国人たちにとって、まさに干天の慈雨のように響いた。

「北の京極殿が、我らの蜂起を後押ししてくださるといのか。しかも、勝利の暁には我らの自治を尊重し、税を軽くしてください」と

「左様。京極の御屋形様は、六角のような時代遅れの専制君主ではありません。實力ある者が正当な報いを受け、民が豊かに暮らせる新しい世を望んでおられるのです。今こそ、重い鉄鎖を断ち切る時。京極家は、勇気ある者たちの味方です」

密偵の巧みな言葉に、国人たちの心は大きく揺らぎ、そしてついに固まった。彼らにとって、誰が守護という名目の地位に就くかはもはや問題ではなかった。自分たちの土地と生活を保障し、対等な関係を築いてくれる者であれば、六角であろうと京極であろうと構わなかったのである。そして今、彼らの目の前には、長年の苦しみから解放される千載一遇の好機が、京極という強力な後ろ盾とともにぶら下がっていた。

各村々の名主や地侍たちは秘密裏に山深い神社や寺院に集まり、寄り合いを重ねた。そしてついに、一つの重大な決断を下した。それは、六角氏の支配を根底から覆すための、かつてない規模の国人一

揆の結成であった。彼らは神仏の御前で一味神水の儀式を執り行った。神前で誓いの言葉を読み上げ、その起請文を燃やした灰を御神酒に混ぜて、全員で回し飲みをする。これで彼らは運命を共にする一つの体となったのだ。

そして、一枚の大きな和紙に自らの名前を放射状に連ねて血判を押した。傘連判状である。首謀者が誰であるかを隠すと同時に、参加するすべての者が対等な立場であることを示すこの血の盟約。そこに記された名前の数は、日を追うごとに雪だるま式に膨れ上がり、野洲、栗太、甲賀、蒲生など、南近江全域の土豪たちを網羅するほどの巨大な組織へと変貌していった。

一方、その頃の観音寺城では、満綱と持綱は足元まで迫り来る破滅の足音に全く気づいていなかった。彼らの周囲は、真実を隠蔽し、主君の機嫌をとることしか考えない佞臣たちで固められており、城下に渦巻く憎悪の叫びは、厚い石垣と白壁に遮られて彼らの耳には届かなかったのである。

「御屋形様の御威光により、南近江はつつがなく治まっております。領民たちも、今年の豊作は六角家の深い御慈悲の賜物であると、日々感謝の祈りを捧げておる次第にござります」そのような虚偽の報告を鵜呑みにし、満綱は連日、城内で優雅な連歌の会や能の催しを開いては、美酒に酔いしれていた。

彼の頭の中にあるのは、京の公家たちとの交際をいかに華やかに保つか、幕府内での格式をいかに維持するかといった、虚飾に満ちた権威の世界の出来事ばかりであった。

「持綱よ。来月は京より高名な連歌師を招き、大々的な歌会を催すこととしよう。六角家の文化的教養の高さを見せつける良い機会ぞ。各郡の代官に命じ、さらに臨時税を徴収して準備に万全を期すよ

う手配せよ。見すばらしい振る舞いは、先祖の顔に泥を塗るに等しいからな」

「はっ。早速手配いたします。愚民どもから絞り上げた富を、雅な文化の庇護のために使う。これこそが上に立つ者の務めにござりましょう。彼らとて、名高き六角家の誉れに貢献できることを喜んで

いるはずですよ。満綱と持綱のこの極限までの驕りと盲目こそが、彼ら自身の首を絞める最大の要因であった。万が一、忠義に厚い老臣が領内の不穏な空気を具申しようものなら、満綱は「己の臆病風を余に吹き込むな」と激怒し、その者を遠ざけた。

彼らは、城の足元で数万の領民たちが武器を研ぎ澄まし、松明の油を準備し、復讐の時を今か今かと待ち構えていることなど、夢にも思っていなかったのである。時代はすでに、彼らが信じ切っていた中世的秩序から大きく逸脱し、巨大な転換点を迎えていた。

室町幕府の権威は、度重なる内乱や徳政一揆の頻発により、確実に揺らぎ始めていた。特に、専制的な権力を振るった第6代将軍・足利義教（1394～1441）が、守護大名・赤松氏によって白昼堂々暗殺されるという前代未聞の事件である嘉吉の乱（1441）以降、幕府の絶対的な支配力は幻想に過ぎないことが、誰の目にも明らかになりつつあった。

中央の権威が衰退すれば、それに依存している地方の守護大名の基盤も当然脆くなる。自らの実力で領国を統治する能力を持たず、民との結びつきを失った者は、容赦なく下からの力によって突き崩され、時代の波に飲み込まれていく。それが、中世から戦国へと向かう過酷な歴史の法則であった。

しかし、伝統と格式の檻の中に閉じこもり、古い夢を見続けていた満綱には、その時代の冷たい風

を読むことができなかつたのである。そして、ついに運命の時が訪れた。秋の収穫が完全に終わり、朝夕の冷え込みが厳しさを増し、厳しい冬の足音が近づきつつあったある新月の夜。南近江の漆黒の夜空に、突如として無数の炎が舞い上がった。それは、各村の鎮守の森で一斉に焚かれた、蜂起の合図となる狼煙であつた。

「立て！今こそ六角の圧政を打ち砕く時ぞ！」

「我らの土地を、我らの手に取り戻せ！」

「親の恨み、子の飢え、今こそ晴らさん！」

長年抑圧され、搾取されてきた国人衆、地侍、そして名主を中心とした農民たちの怒りが、ついに臨界点を突破して大爆発を起こしたのである。闇を切り裂くように法螺貝の野太い音が鳴り響き、各村の半鐘が乱れ打たれる。

甲賀の深い山奥から、野洲川の豊かな流域から、そして琵琶湖の静かな湖畔から、竹槍や農具を改造した武器、あるいは大切に保管されていた古い刀槍を手にした者たちが、怒濤のごとく湧き出してきた。その数は瞬く間に数万という途方もない規模に膨れ上がり、一つの巨大な軍勢となつて、六角氏の権威の象徴である観音寺城を目指して怒濤の進軍を開始した。

一揆勢の行軍は、凄まじい熱気と狂乱に包まれていた。彼らは進路にある守護代の陣屋や代官所、六角氏に結託して暴利を貪っていた悪徳商人の屋敷を次々と襲撃し、門を打ち壊し、火を放つた。憎き借金の証文や年貢の帳簿はことごとく引き裂かれて炎の中に投げ込まれ、土倉は打ちこわされた。夜空を真っ赤に焦がす炎は、長年の恨みを晴らし、汚れた古い秩序を焼き尽くす浄化の炎でもあつた。



彼らの怒号と無数の足音は大地を激しく震わせ、静かな近江の夜を完全に引き裂いた。

観音寺城に急報がもたらされたのは、一揆勢がすでに防衛線をことごとく突破し、城の麓の町にまで雪崩れ込んできた時であった。深夜、豪華な寝所でまどろんでいた満綱の耳に、突如として城内を走り回る慌ただしい足音と、悲鳴に近い叫び声が飛び込んできた。寝所の襖が乱暴に開け放たれ、当番の家臣が顔面を蒼白にして転がり込んできた。

「申し上げます！ 御屋形様、一大事にござります！ 領内の国人どもが徒党を組み、大規模な一揆を起こして城へ向かって進軍中！ すでに城下の町には火が放たれ、防ぎに向かった手勢はことごとく打ち破られました。敵の数は数万に及ぶとのことにござります！」

満綱は寝所から跳ね起き、信じられないという顔で家臣を睨みつけた。彼の古風で格式張った口調は、極度の狼狽と混乱によって甲高く震え、威厳の欠片も失われていた。

「な、何だと！？ 一揆だと？ 愚にもつかぬ冗談を申すな！ この佐々木嫡流の六角家に弓を引く者など、近江の地におるはずがなろう！ 誰ぞが虚報を流しておるのに違いない！ 何かの間違いではないのか！」

満綱にとって、領民が自らの意志で武装し、主君の城を攻めるなどということは、天と地がひっくり返るほどのあり得ない出来事であったのだ。それは彼の理解できる宇宙の法則を完全に逸脱していた。

そこへ、慌てて具足を引きつけた姿の持綱が、血相を変えて駆け込んできた。「父上！ 報告は真実にござります！ 城の南門から見下ろせば、麓は一面の火の海！ 敵の松明の列は、まるで地獄の業

火のように山を取り囲みつつあります！」

満綱はよろめくようにして縁側へと向かい、夜の闇を見下ろした。その瞬間、彼のこれまでの世界観を完全に粉碎する光景が目に見えびんできた。観音寺城の麓には、数え切れないほどの無数の炎が蠢き、怒号とときの声が地鳴りのように下から突き上げてきていた。それは、彼が「地を這う虫けら」と蔑んできた民衆たちが、その怒りを結集して巨大な一つの龍となり、権力者に向かって鋭い牙を剥いている姿であった。

「おのれ、下郎どもめ！ 許さん、絶対に許さんぞ！ 直ちに兵を集めよ！ 近隣の家臣どもに触れを出し、一揆の鎮圧に向かわせよ！ 首謀者の首は刎ね、一族郎党皆殺しにしてくれる！」満綱は必死に威厳を保とうと虚勢を張って怒鳴り散らしたが、その命令が空虚に響くことを、彼自身が最もよく理解し始めていた。彼の声は震え、膝は恐怖で小刻みに揺れていた。

事態はすでに、六角氏の想像を絶する絶望的な状況へと陥っていた。観音寺城からの使者は、包囲網を敷いた一揆勢によってことごとく道中で討ち取られるか、捕縛された。連絡網は完全に断たれ、幕府や近隣の味方に援軍を呼ぶ手段は永遠に失われていた。さらに恐ろしいことに、城内に詰めていた家臣や兵士たちの中からも、一揆勢の圧倒的な熱量に呼応して寝返る者や、命の恐怖に駆られて武器を捨て、逃亡する者が続出していたのである。

彼らの中にも、国人衆と密かに血縁関係にある者や、六角氏の驕り高ぶった態度に内心深い不満を抱いていた者が数多く存在した。権威という薄っぺらな糸で結ばれていただけの主従関係は、命の危機という冷酷な現実を前にして、いとも簡単に千切れ飛んでしまったのだ。

「御屋形様！西の丸を守る兵たちが持ち場を放棄し、山を下りて逃げ出しました！」

「北の門より、敵の一部が侵入！防衛線が崩壊しました！もはや防ぎきれません！」次々と飛び込んでくる絶望的な報告に、満綱はついに茫然自失となってその場にへたり込んだ。

「なぜだ…なぜ、皆余を見捨てるのだ…。余は室町殿よりこの近江を任された、正当なる守護であるぞ。由緒正しき佐々木の血を引く当主であるぞ…。なぜ、誰も余の命令に従わぬのだ！」

満綱の口から漏れる言葉は、実体を伴わない権威という幻影にすぎりつく、哀れな男の悲鳴であった。彼には、なぜ自分が見捨てられたのか、その本当の理由が最後まで理解できなかった。泥臭い信頼関係を蔑ろにし、土と民から遊離した者がどのような末路を辿るのか、その歴史の教訓を彼は学んでいなかったのである。

夜が明け、白々とした朝の光が近江の地を照らし出す頃には、観音寺城は完全に一揆勢によって包囲されていた。山の麓から中腹までを埋め尽くした数万の群衆は、怒りの咆哮を上げながら、次々と城の防衛設備を打ち破っていった。

観音寺城は、自然の急峻な地形を活かした堅牢な山城であり、本来ならば外からの攻撃には滅法強かった。しかし、それは内部に十分な兵力と強固な団結力があってこそ話である。兵の半数が逃亡し、残った者たちも戦意を完全に喪失している現状では、いかに堅固な石垣も、巧妙に配置された虎口も、ただの石の山に過ぎなかった。

一揆勢の先頭に立つ国人衆の若き武将が、大音声で城の頂に向かって叫んだ。「六角満綱！持綱！貴様らの悪政のせいで、我らはどれほどの血の涙を流してきたか！どれほどの家族が飢えに苦しんだ

か！その報いを受ける時が来たのだ！潔く腹を切れ！」その声は、何万もの民衆の怒りを代弁する、地を揺るがすような響きを持っていた。

城内に残されたわずかな六角氏の忠臣たちは、必死に弓に矢をつがえ、石を落として抵抗を試みた。が、怒り狂う民衆の波を止めることはもはや不可能であった。防壁が突破され、三の丸が落ちた。続いて二の丸に火が放たれた。黒煙が天を突き刺すように立ち上り、かつての繁栄を誇った壮麗な櫓や美しい御殿が次々と炎に包まれ、轟音を立てて崩れ落ちていく。その光景は、南近江の国人たちにとって、長きにわたる旧体制の終焉を告げる象徴的な光景であった。

本丸の奥深く、炎の熱気と煙が立ち込める薄暗い部屋の中で、満綱と持綱は最後の時を迎えようとしていた。周囲には、最後まで逃げ出さずに付き従った数名の老臣たちが、悲痛な面持ちで控えている。外からは、一揆勢の地鳴りのような勝鬨と、建物を破壊する凄まじい轟音が絶え間なく響いてくる。

満綱は、すでに直垂を脱ぎ捨て、具足を取り払い、真っ白な死装束に身を包んでいた。彼の顔には、先ほどまでの醜い狼狽は消え失せ、代わりに名門の当主としての最後の意地と、取り返しのない深い絶望が入り交じった、異様な静けさが漂っていた。

「——時代が変わったのだな、持綱よ」満綱は、同じく白装束姿の嫡男に向かって、ひび割れた声で静かに語りかけた。

「我らが信じてきた秩序、佐々木の血脈という絶対的な権威は、とうの昔に崩れ去っていたのだ。我らは、実体のない幻の上で胡坐をかき、己の足元が完全に空洞になっていることに気づかなかった。

あの地を這う虫けらどもが、これほどの力を秘めていたとは——」

満綱の古風な言い回しの中には、自らの愚かさを悟った者の痛切な悔恨が込められていた。彼は、自らが信じ、体現してきた中世的な守護大名という存在そのものが、すでに時代遅れの遺物となってしまうことを、自らの命と引き換えにようやく理解したのである。

「父上——」持綱は、血を吐くような声で応えた。彼の目には、無念と恐怖の涙が溢れていた。「——我らは、間違っていたのでしょうか。誇り高く生きることが、上に立つ者として振る舞うことが、罪であったのでしょうか」

「——誇りだけで国は治まらぬということだ。氏頼公が国人どもと泥に塗れて築き上げたものを、我らは格式という綺麗事で覆い隠して腐らせてしまった。その報いを、今受けているのだ。——北の京極持清めは、さぞかし腹の底で笑っておろうな。長年の因縁を、我ら自身の手で終わらせてしまったのだから——」満綱は、自嘲気味に笑い、そしてゆっくりと短刀を手を取った。

冷たい刃が、揺らめく炎の光を反射して不気味に光る。「だが、これだけは忘れるな。我らは佐々木嫡流、誇り高さ六角の一族である。下郎どもの汚れた手にかかることだけは、断じて許されぬ。我らは、我ら自身の誇りのために死ぬのだ」

満綱の言葉には、最後にして最大の威厳が込められていた。彼は、時代に敗北したことを認めながらも、自らのアイデンティティだけは決して手放そうとしなかった。それが、守旧派として生きた男の、せめてもの意地であった。

「——承知仕りました。父上のお供、仕ります」持綱もまた、震える手で短刀を握り締め、深く

頭を下げた。

外の騒ぎがいよいよ本丸の御殿に迫り、障子が破られる音が響いたその時、満綱は自らの腹に深く刃を突き立てた。苦悶の表情を浮かべながらも、彼は声一つ上げず、氣力を振り絞って一文字に腹を掻き切った。鮮血が白い装束を染める。続いて持綱も、父の後を追うように悲痛な叫びとともに自刃した。付き従っていた老臣たちも、次々と主君の屍の横で自らの首を掻き切り、命を絶ていった。

血が暈を赤く染め上げ、彼らの命の灯火が完全に消えゆくのと時を同じくして、本丸の御殿に一揆勢がなだれ込んできた。彼らが目にしたのは、燃え盛る炎を背景にして、己の格式と誇りに殉じた六角満綱と持綱の凄惨たる最期の姿であった。長きにわたり近江の南半国を支配し、絶対的な権勢を誇ってきた名族・六角氏の当主が、自らの領民が起こした一揆によって自害に追い込まれるという、前代未聞の悲劇。

観音寺城の落日は、ただ一つの大名家の没落を意味するだけではなかった。それは、室町幕府が作り上げた「守護大名」という中世的な支配体制が、下からの力によって完全に破綻したことを天下に示す、歴史的にも衝撃的な事件であった。山の稜線から吹き下ろす秋風が、焼け落ちた観音寺城の灰を琵琶湖の方角へと吹き飛ばしていく。かつての壮麗な姿は見る影もなく、巨大な石垣だけが黒く焦げて無惨な姿を晒していた。

主を失った南近江は、その後、背後で糸を引いていた京極持清のあからさまな軍事介入や、力を得た国人衆同士の血で血を洗う覇権争いによって、終わりの見えない混沌と無秩序の暗黒期へと突入していくことになる。六角氏は事実上の滅亡状態となり、一族の生き残りの者たちはちりちりに逃亡し、

深い山奥や他国への潜伏生活を余儀なくされた。

しかし、この深い絶望のどん底にあつて、生き残ったわずかな六角家の者たちの心には、ある強烈な認識が芽生え始めていた。燃え燻る観音寺城の残骸を、遠く離れた山中からじっと見つめる一団があつた。それは、持綱の弟であり、一族の血を引く幼き亀寿丸きじゅまる（後の高頼）と、彼を命がけで一揆の魔の手から守り抜いた数名の忠実な家臣たちであつた。

亀寿丸の瞳には、黒煙を上げながら炎に包まれて崩れ落ちる我が家の象徴が、恐ろしいほどの鮮明さで焼き付いていた。恐怖よりもむしろ、何かが決定的に終わつたという虚無感が彼の心を支配していた。

「……よく見ておくのです、若君」亀寿丸をしっかりと抱き抱える老臣は、血の涙を流しながら、絞り出すように語りかけた。

「あれが、権威という幻にすぎりついた者の末路にござります。幕府が与えてくれる守護という肩書きなど、いざという時には何の役にも立ちませぬ。血筋の良さや格式の高さなど、ただの虚構に過ぎなかつたのです」老臣の言葉は、悲哀に満ちていると同時に、血を吐くような冷酷な教訓として幼い亀寿丸の胸に深く突き刺さつた。

「御屋形様も、持綱様も、守護という名に殺されたのです。時代は変わりました。これからの世を生き抜くためには、朝廷や幕府の権威など、一切信用してはなりません。頼れるものは、己の知恵と力、そして、真に心を通わせた者たちとの絆のみ。それを忘れては、我らに明日への道はありません」

泥に塗れることを恐れず、実力をもって土豪たちを従え、あるいは対等の盟友として結びつき、独

自の力で領国を切り拓いていくこと。それこそが、旧体制が完全に崩壊したこの過酷な世界で生き残るための、唯一の道であった。それはかつて氏頼が成し遂げ、満綱が忘れ去った道でもある。

「我らは、いつの日か必ずあの城を取り戻します。そして、権威ではなく、真の実力によってこの近江を支配する、新たな大名家を打ち立てるのです。そのためには、修羅の道をも歩まねばなりません。どんなに卑怯と呼ばれようと、勝たねばならぬのです」幼き日の高頼（幼名 亀寿丸）は、老臣の言葉をじっと聞き入りながら、黒く焦げた織山の頂を無言で睨み据えていた。

彼の小さな手は、己の着物の裾を強く握りしめている。その心の中には、父や兄が信じた古い価値観への完全なる決別と、新しい時代を自らの実力だけで切り拓いていくという、不屈の闘志が静かに、しかし確実に芽生え始めていた。それは、中世の守護大名としての六角氏が完全に死滅し、手段を選ばず実力のみで戦乱の世を生き抜く「戦国大名」という新たな化け物が、血と泥と灰の中から産声を上げた瞬間であった。

湖水を染める夕陽は、まるで一族が流したおびたしい血の色のように赤く、不気味なまでに美しく輝きながら、琵琶湖の彼方の連山へとゆっくりと沈んでいった。だが、その深い闇の底で、近江六角一族の執念は決して消え去ってはいなかった。

没落の極みから再起を果たし、京極という宿敵を打ち破り、やがて幕府そのものと真っ向から対峙するための、長く過酷な闘いの歴史が、今まさに幕を開けようとしていたのである。時代は、力ある者が全てを奪い取る、荒々しい戦国へとその扉をこじ開けたのであった。

第四章 鉤の陣

南近江の覇権は、北近江を本拠とする同族にして不倶戴天の宿敵、京極氏に奪われたままであった。かつて足利尊氏の寵愛を一身に受け、既存の価値観を嘲笑う娑婆羅大名として名を馳せた京極道誉。

その末裔である京極持清は、幕府の権威を背後にちらつかせながら、六角氏の旧領を次々と武力で侵食していた。持清は当代屈指の権力者である細川勝元と固く結びつき、幕府内での己の地位を盤石なものにしつつ、南近江の国人たちを容赦ない力で押さえつけていた。

一方の六角家は、当主を失った混乱から内紛を繰り返し、もはやかつての守護大名としての面影はどこにもなかった。高頼自身も、一時は暗殺の危機から逃れるために領国を追われ、泥水をすすりながら山野を彷徨う流浪の身となっていたのである。

しかし、高頼の瞳の奥底には、絶望の影は微塵もなかった。深い緑に包まれた甲賀の山中。昼なお暗い鬱蒼とした杉木立の中に、高頼の仮の陣所が設けられていた。周囲には険しい岩肌が露出し、耳を澄ませば谷川のせせらぎと鳥の鳴き声しか聞こえない、世間の喧騒から完全に切り離された場所である。粗末な板葺きの小屋の前に床几を据え、高頼は眼下に広がる琵琶湖の青い湖面と、その向こう

にそびえ立つ比叡山の雄大な山並みを、静かに見つめていた。

彼の身なりは、およそ名門の当主とは呼べないほど質素そのものであった。都の公家や守護大名たちが好んで着るような、色鮮やかな絹の直垂などではない。泥と汗に汚れ、所々が擦り切れてほつれた動きやすい小具足を身につけ、足元はわらじ履きであった。しかし、その逞しく引き締まった体躯と、獲物を狙う鷹のように鋭く光る眼光は、銀閣で茶の湯や連歌にうつつを抜かず軟弱な武将たちとは一線を画する、野性味と生命力に溢れた真の武将のそれであった。

「御館様おやかたさま、西軍の山名宗全入道殿より、密使が到着いたしました」背後の茂みから音もなく現れ、声がかかった。高頼は驚く様子もなく、ゆっくりと振り返った。そこに立っていたのは、甲賀衆の頭領の一人である望月出雲守であった。甲賀の地侍たちは、周囲の山々に守られた閉鎖的な地形を利用し、独自の自治組織である惣村を形成していた。彼らは厳しい掟を持ち、誰の家臣にもならないという独立歩の気風を重んじる者たちであった。

通常であれば、没落した守護家の血筋など相手にもしないはずである。しかし高頼は、この山中に身を潜めている間、権威を振りかざすことなく彼らと寝食を共にし、同じ釜の飯を食い、夜には囲炉裏を囲んで安酒を酌み交わした。時には自ら泥にまみれて彼らの農作業すら手伝い、猪の狩りでは先頭に立って槍を振るった。そうした泥臭い日々の積み重ねの中で、高頼は甲賀の男たちと、身分という壁を越えた深い絆を築き上げてきたのである。

「ご苦勞であった、出雲。して、山名殿からの書状、いかがであったか」

高頼の言葉遣いは、重々しい威厳を持ちながらも、どこかざっくばらんであり、相手を身分の上下

で差別しない響きがあった。それは、かつて自害に追い込まれた祖父・満綱のような、空虚な権威と格式に縋りつく旧時代の守護の言葉ではなかった。

出雲守は恭しく膝をつき、懐から奉書紙に包まれた書状を差し出した。高頼はそれを受け取り、無造作に封を切って目を通した。力強い筆致で書かれたその書状には、西軍に加勢して近江の京極勢の背後を脅かし牽制してくれば、戦勝の暁には南近江の守護職を正式に安堵し、六角家再興を幕府の権威をもって全面的に支援する旨が記されていた。幕府の主流を占める東軍に対抗するため、高頼に「西軍の將」という大義名分を与えようという、山名宗全からの甘い誘いであった。

高頼の唇の端が、微かに、しかし確かに吊り上がった。「守護職の安堵、か。宗全入道も、未だ古い夢を見ているようだな」高頼は嘲笑を漏らすと、書状を軽く丸め、傍らで赤々と燃える囲炉裏の火の中に放り込んだ。一瞬にして火が燃え移り、乾いた音を立てて炎が上がる。山名宗全の堂々たる署名と花押が、瞬く間に黒い灰へと変わっていく。出雲守は主の思いがけない行動に驚いたように目を見開いたが、高頼は腹の底から響くような低い声で笑った。

「よいか、出雲。俺は山名のために戦うのではない。幕府の犬に成り下がった京極持清ごと近江から叩き出すために、ただ西の勢力を利用してやるだけだ。守護職という肩書きなど、今の世では紙切れ一枚ほどの価値もない」高頼は立ち上がり、燃え尽きた灰を足で踏み躪った。その横顔には、一族の血塗られた歴史から学んだ冷酷なまでの現実主義が刻まれていた。

「俺の祖父たちは、その『守護』という幻の権威に縋った。自分たちが偉いのだと錯覚し、下にいる者たちの声を聞こうとしなかった。だからこそ、国人たちに見限られ、城を追われ、惨めに腹を切る

羽目になったのだ。俺は二度と同じ轍は踏まん。近江の地は、遠く離れた京の都から送られてくる幕府の御教書で治めるのではない。己の腕と、ここにいるお前たちと流した血の絆で奪い取り、治めるのだ」

高頼の言葉には、燃え盛るような情熱と、時代を冷徹に見透かす知性が混在していた。彼は、既存の権威というものがどれほど脆く、そして無力であるかを、一族の絶頂からの転落という悲劇を通じて、骨の髄まで理解していたのである。

東軍につくか、西軍につくか。將軍家の跡継ぎが誰になるか。そんな京の公家や大名たちの基準は、高頼にとってはどうでもよいことであった。彼にとって重要なのは、この近江の土を自分たち自身の手に取り戻し、長年自分たちを苦しめてきた京極という絶対的な敵を打ち破ること、ただ一つであった。

その夜、高頼は甲賀衆の頭領たちに加え、密かに連絡を取り合っていた南近江の国人衆の頭目たちを陣所に集め、大規模な酒宴を開いた。鬱蒼とした森の中に焚き火の赤い炎がいくつも上がり、男たちの日に焼けた険しい顔を不気味に照らし出している。大きな甕から素焼きの杯へと並々と注がれる濁り酒の酸っぱい匂いが、初秋の夜風に漂っていた。

集まった国人衆の中には、かつて六角の傲慢さに耐えかね、満綱たちを見限って一揆を起こした者たちの子孫も多く含まれていた。本来であれば、彼らは六角の正当な後継者である高頼に対して強い警戒心や罪悪感を抱き、距離を置かずの者たちであった。

事実、酒宴の序盤には、どこか腹を探り合うような重苦しい空気が漂っていた。しかし、高頼は上

座にふんぞり返ることなく、自ら彼らの間を歩き回った。大声で笑い、彼らの肩を力強く叩き、時には下品な冗談を交えながら泥酔した者の杯に酒を注いで回った。その飾らない振る舞いに、男たちの間の緊張は次第に解けていった。

宴がたけなわとなった頃、高頼は焚き火の前に歩み出た。

「皆の者、聞け！」高頼が声を張り上げると、あれほど騒がしかった喧騒がピタリと止んだ。何十もの鋭い視線が、一斉に彼に注がれる。炎の明かりに照らされた高頼の顔は、戦を決意した猛禽のように精悍であった。

「俺は六角の血を引く者だが、昔の守護のようにお前たちに命令を下すつもりはない。お前たちも知っての通り、今の六角家にはお前たちにくれてやる金もなければ、幕府の後ろ盾もない。あるのは、ただ一つ。京極の圧政に苦しむこの近江の地を、何が何でも取り戻したいという、俺の我執だけだ！」

高頼は手に持った杯を高く掲げ、その熱を帯びた眼差しで、車座になった男たち一人一人の顔を舐めるように見回した。「京極持清は、幕府の威光を笠に着て、お前たちの土地に重税を課している。年貢だけではない、段銭や棟別銭と称して、お前たちが血水にまみれて稼いだ実りを根こそぎ奪い取っている。少



しでも逆らえば、理不尽な理由をつけて討伐の軍を差し向け、村を焼き払っている。あいつらは、近江をただの都への通り道、ただの金蔓かねづるとしか思っていない。お前たちの暮らしなど、虫ケラほどにも考えていないのだ！」高頼の言葉は核心を突いていた。国人衆たちは一様に顔を歪め、握りしめた拳を震わせた。

「だが、違う！この土地は、俺たちの血と汗が染み込んだ俺たちのものだ。お前たちの祖先が開墾し、守り抜いてきた土だ。今、都では細川と山名が、自分たちの権力争いのために天下を燃やしている。幕府が東軍だの西軍だのと阿呆な騒ぎを起こしているこの隙に、俺たち自身の力で、近江を俺たちの手に取り戻そうではないか！」

高頼の言葉は、小手先の理屈や飾り立てた大義名分が一切ないがゆえに強く、国人たちの心を激しく揺さぶった。彼らは長年、京極氏の支配下で「守護の権威」「幕府の法」という目に見えない重圧に押し潰されそうになりながら生きてきた。幕府の命令だから、守護の決定だからと、どれほど不条理な要求であっても呑まざるを得なかったのだ。

高頼の言う通り、幕府の権威などという幻影を捨て去り、自分たちの土地を、自分たちの実力で守り抜く。それこそが、彼らが心の奥底で長年渴望し続けていた真の願いであった。

「俺は戦う。手段は選ばん。夜討ち、朝駆け、騙し討ち、毒殺、何でもやる。名誉など犬にでも食わせておけ。勝つためならば泥水もすする。お前たち、俺と一緒に天下の幕府に反逆し、新しい近江を創り上げる覚悟はあるか！」一瞬の静寂が山を包んだ。直後、爆発するような鬨の聲が、夜の山林を激しく震わせた。

「応ッ！」

「やっつてやろうじゃねえか！」

男たちは次々と立ち上がり、刀の柄を打ち鳴らし、飲み干した杯を地面に叩き割って高頼への強烈な同調を示した。彼らの瞳には、かつての守護への恐れではなく、新たな指導者への狂信的な熱狂が宿っていた。彼らはもはや、「守護と国人」という絶対的な上下関係ではなく、共通の敵に立ち向かう「対等な戦友」として結びついたのである。

ここに、幕府の権限を完全に無視し、実力と当事者同士の契約のみで領国を支配しようとする「戦国大名・六角高頼」が、実質的に誕生した瞬間であった。翌日からの高頼の動きは、疾風迅雷の如くであった。

京極持清の主力軍は、東軍の中核として京へ上洛しており、花の御所周辺や相国寺、御霊みたまの森などで、西軍と連日のように激しい市街戦を繰り広げていた。そのため、南近江の拠点に残されているのは、少数の守備隊と留守居役の武将たちのみである。高頼はこの千載一遇の好機を、決して逃さなかった。最初の標的となったのは、野洲川のほとりに位置し、南近江支配の要となる京極方の前線拠点、長光寺城であった。

高頼は、正規の軍勢のように堂々と陣を構え、使者を送って名乗りを上げるような、中世的な戦の作法は一切無視した。彼は甲賀衆の最大の特技である忍びの術と、地形を熟知した者たちによるゲリラ戦術を最大限に活用したのである。

空に月すら出ていない新月の夜。漆黒の闇に包まれた長光寺城の周辺に、黒装束に身を包んだ数十

の甲賀衆が、音もなく忍び寄っていた。高頼自身も黒塗りの具足を纏い、最前線の草むらの中で息を潜めていた。彼らは火縄の焦げる匂いを消すために、獣の糞を混ぜた特別な香を風下で焚き、草木の擦れる音すら殺して、城の深い堀へと近づいていく。

「御館様、城内の警備は予想以上に手薄です。皆、京での大戦の噂話に夢中で、足元への警戒が完全に疎かになっております」暗闇からふっと湧き出たように戻ってきた斥候の望月出雲守が、高頼の耳元で囁いた。高頼は闇の中で冷徹な笑みを浮かべ、無言で右手を振り下ろした。それが、殺戮の合図であった。

数名の身軽な甲賀兵が、鉄の爪と鉤繩を使って、垂直に近い石垣をあっという間に登り切り、城壁の裏側に回り込む。彼らは音を立てずに背後から見張りの兵の首を掻き切ると、遺体を静かに横たえ、内側から重い城門の門を外した。門が軋む音とともにわずかに開いた瞬間、高頼は抜き身の太刀を一段に構え、先頭を切って城内へと雪崩れ込んだ。

「かかれ！一人も逃すな！全て斬り捨てろ！」高頼の情熱的で残忍な怒号が、夜の静寂を切り裂いた。

それと同時に、城の四方から油を含ませた火矢が雨霰と射込まれ、乾燥した兵糧庫や矢倉が次々と紅蓮の炎に包まれていく。寝込みを襲われた京極方の兵士たちは、何が起きたのか理解する間もなく、混乱の中で次々と討ち取られていった。武器をつける暇もなく裸足で逃げ惑う者たちを、六角の兵たちは容赦なく背後から槍で突き刺した。

高頼は修羅の如く太刀を振るい、立ちほだかる敵の将校たちを鎧ごと叩き斬っていった。彼の戦い

方には、「我こそは」と名乗りを上げて一騎打ちを挑むような、優雅な武士の作法は微塵もなかった。ただひたすらに効率よく、味方の損害を抑え、敵を完全に殲滅せんめつすることだけを目的としていた。刃がこぼれば敵が落とした刀を拾い、邪魔になれば泥を投げつけ、急所を的確に狙う。

長光寺城は、わずか一晚の激闘で完全に陥落した。

夜が明け、朝霧が晴れる頃には、城跡には無数の黒焦げになった死体が転がり、血の海ができていた。その本丸の高台に、六角家の紋である「四つ目結」を描いた巨大な旗が、朝風を受けて誇らしげに翻っていた。この鮮烈で無慈悲な奇襲劇は、南近江の国人や農民たちに強烈な衝撃を与えた。長年、京極氏の圧倒的な武力の前に屈し、諦めていた彼らは、高頼の容赦のない戦いぶりに畏怖の念を抱くと同時に、抑えきれない熱狂的な期待を寄せ始めた。

「六角の若殿が戻ってきたぞ！」

「京極の犬どもを叩き出してくださいさるのだ！」

噂は瞬く間に近江一円に広がり、高頼のもとには、京極氏の支配に不満を持つ地侍や、生活を立ちゆかなくされた農民たちが、鎌や竹槍を握りしめて次々と馳せ参じた。その軍勢は日に日に膨れ上がり、数千の規模へと成長していった。高頼の快進撃は止まらなかつた。彼は兵を休めることなく、野洲、蒲生、神崎と、次々と京極方の城砦や代官所を落としていった。

その戦術は常に神出鬼没であり、敵の予測を完全に裏切るものであった。ある時は昼間に大軍を装って土煙を上げ、敵を城に籠城させておいて、その隙に別動隊に補給路を完全に断たせて干殺しにした。またある時は、敵の援軍が通る狭い山道に伏兵を潜ませ、谷底へ落とすための岩や丸太を仕掛け、一

網打尽にした。さらに、敵の陣地の井戸に腐った動物の死骸を投げ込んで水を断ち、偽の伝令を送って部隊を分断させ、同士討ちを誘発させることすら平然と行った。

高頼は、名誉や格式といった古い武士の誇りよりも、「勝利」という確固たる結果のみを貪欲に求めた。敵を騙し、混乱させ、徹底的な恐怖を植え付ける。それはまさに、戦国という新時代の、残酷なまでに合理的な兵法そのものであった。

京の都で細川勝元と共に西軍と戦っていた京極持清のもとに、南近江の重要拠点が次々と六角勢によつて陥落し、一族の者が次々と討ち死にしているという凶報が届いたのは、それから間もなくのことであった。

「おのれ、高頼の小童めが……！没落した流浪の身の分際で、この幕府の重鎮たる我が京極に刃向かうとは！恩知らずの国人どもめ、一人残らず申刺しにしてくれる！」

持清は顔を真っ赤にして激怒し、直ちに一族の猛将たちに数千の精鋭部隊を預け、近江への大規模な反転攻勢を命じた。

しかし、高頼はその京極軍の動きすらも、甲賀や伊賀の忍びを通じた徹底した諜報活動によって、完全に先読みしていた。彼は敵の正規の大軍と、平野部で正面からぶつかることを徹底して避けた。代わりに、近江の複雑な地形——入り組んだ山林、沼地、湖畔の葦原——を最大限に利用した遅滞戦闘を展開したのである。

京極の軍勢が進軍してくれば、高頼の部隊は煙のように山林へと姿を消し、もぬけの殻となった陣地を残すのみであった。そして敵が進軍の疲れで油断した深夜や、激しい雨で火縄が使えず足場が悪

くなつた時を狙つて、執拗な襲撃を繰り返した。物資を運ぶ輜重隊しちゆうたいをピンポイントで襲い、兵糧を焼き払い、将校だけを狙撃しては再び闇へと消える。

甲賀衆の能力を極限まで引き出した高頼の変幻自在の戦法により、京極の討伐軍は次第に疲弊し、士気を喪失し、疑心暗鬼に陥つていった。圧倒的な兵力と優れた武器を持ちながら、目に見えない敵に翻弄され、じわじわと削られていく恐怖。それは、かつて婆娑羅大名として既存の秩序や権威を嘲笑い、時代を切り開いた京極氏が、今度はさらに常識外れな高頼の実力主義の戦術によつて、古い権威として嘲笑われ、時代遅れの存在として扱われる側へと転落していく、歴史の残酷な皮肉であつた。

そして、季節が焦熱の夏から、風冷たい秋へと移り変わる頃。近江の山々が紅葉に染まり始めた時期、高頼はついに、最大の目標へと軍を進めた。六角氏の本来の居城であり、南近江の支配の絶対的な象徴である観音寺城である。

大量の矢や石、兵糧を運び込み、守りを盤石に固めていた。

城の麓の平野部に陣を敷いた高頼は、夕暮れの赤い光に染まる織山を、床几に腰掛けて見上げていた。冷たい秋の風が彼の髪を揺らし、燃えるような紅葉が山肌をまだらに彩っている。その静かで美しい情景とは裏腹に、高頼の胸の中には、長年抑え込んできた激情がマグマのように渦巻いていた。

「ついに、戻つてまいりましたな」傍らに控える宿老の伊庭貞隆いばさだたかが、感慨深げに、声を震わせて呟いた。彼は満綱の時代から六角家に仕え、一族の絶頂からの転落、暗殺の恐怖、流浪の苦難をすべて高頼と共に見届けてきた、古参の忠臣であつた。貞隆の深い皺が刻まれた目には、薄っすらと涙が浮かんでいた。

「御館様。この城を取り戻せば、六角家は再び近江の主として、華々しく返り咲くことができます。先代様方が流された血の無念、ようやく晴らす時が参りました」高頼は貞隆をゆっくりと振り返り、静かに、しかし断固たる意思を持って首を振った。

「貞隆。俺は、先代たちの無念を晴らすために戦っているのではない。そして、かつてのような偉ぶった『近江の主』に戻るつもりも毛頭ない」

「御館様……？それは、いかなる意味で……」

「俺の祖父たちは、この城の巨大さと、幕府から与えられた守護という肩書きに胡坐をかいていた。高い本丸から見下ろすだけで、下で泥にまみれて生きる国人や農民たちの苦しみや怒りが見えなかったのだ。だからこそ、一番肝心な時に裏切られた。あの見事な石垣は、俺たち一族の傲慢さが築いた墓標に過ぎん」

高頼の視線は、城の最も高い場所、かつて本丸があった場所へと真っ直ぐに向けられた。「俺がこの城を奪い返すのは、失われた過去を取り戻すためではない。新しい未来を切り拓くためだ。幕府の権威を完全に否定し、俺たち自身の力で新しい秩序をこの地に創り上げる。その確固たる決意を天下に示すための、最初の狼煙に過ぎないのだ」

その夜、高頼は全軍に総攻撃の命を下した。観音寺城の攻防戦は、それまでの夜襲を中心とした小規模なゲリラ戦とは一転し、正面からの壮絶な力業のぶつかり合いとなった。高頼は、これまで味方につけてきた国人衆、農民兵、そして甲賀や伊賀の精鋭たちを総動員し、四方の登城口から波状攻撃を仕掛け、城へと殺到させた。

「進め！ 矢の雨など恐れるな！ 立ち止まるな！ 一歩でも退いた者は、俺がこの手で背後から斬る！」
高頼自ら先頭に立ち、大音声で兵たちを鼓舞する。彼の姿は、漆黒の闇の中で無数に燃え盛る松明の光に赤々と照らされ、まるで地獄から蘇った戦神のようであった。

手製の竹盾を掲げ、怒号を上げながら急勾配の山道を駆け上がる六角軍に対し、城内からは雨霰と矢が降り注いだ。さらに、山頂から巨大な石や、煮えたぎる油、糞尿が容赦なく転がり落ちてくる。味方の兵が次々と石に潰され、油を浴びて血や泡を吹き出しながら倒れていく。山の斜面は死体で埋め尽くされ、血の海と化した。

しかし、高頼の部隊は決して歩みを止めなかった。彼らの目には、死への恐怖よりも、高頼という一人の男が放つ熱狂的な狂気が完全に伝染し、異様な興奮状態に陥っていた。彼らは同胞の死体を足場にして、狂ったように山を登り続けた。

「門を壊せ！ 爆薬を仕掛ける！」

甲賀の忍びたちが、矢の雨を掻き潜り、城の防衛の要である三の丸の分厚い木戸に大量の火薬を仕掛けた。導火線に火が放たれると、耳を聳するような轟音と共に、門が木端微塵に吹き飛んだ。まだ煙が立ち込める中、吹き飛んだ門の残骸を踏み越え、高頼は真つ先に太刀を振り翳して敵陣へと突入した。

「我こそは六角高頼！ 命が惜しくば道を開けい！」その一太刀は凄まじい威力を秘めていた。立ち塞がる敵の長槍を叩き折り、兜ごと頭蓋を真つ二つに叩き割る。吹き出す返り血を全身に浴び、顔の半分を真紅に染めた高頼の凄惨な姿に、京極の兵たちは極度の恐怖で足が竦み、武器を取り落とした。

彼らは所詮、守護の命令で嫌々戦わされているだけの寄せ集めに過ぎなかった。

自らの土地を奪い返すという狂気じみた執念を持ち、死をも恐れぬ六角軍とは、士氣と覚悟の差が歴然としていたのである。激しい白兵戦は夜通し続いた。刀がぶつかる金属音、肉を断つ鈍い音、兵士たちの断末魔の叫びが畿山に響き渡った。三の丸、二の丸と、京極方の防衛線は次々と突破され、血の川が山を流れ下った。

夜明け前、ついに本丸へと迫った高頼の前に、京極方の総大将はもはや勝ち目がないと悟った。彼は一族の誇りを守るため、自ら本丸の御殿に火を放ち、燃え盛る炎の中で一族郎党と共に切腹して果てた。

夜が明け、太陽が比叡山の稜線から昇る頃。畿山を包んでいた煙が晴れ、観音寺城は完全に六角軍の手に落ちていた。焼け焦げた木材の匂いと、むせ返るような濃い血の臭いが立ち込める本丸の跡地に、高頼は立っていた。彼の足元には、黒焦げになった柱や、崩れ落ちた瓦、そして無数の敵味方の死体が散乱している。彼方の眼下には、朝日にキラキラと黄金色に輝く琵琶湖の広大な水面が、まるでこの下界の惨劇など知らぬかのように、鏡のように静かに広がっていた。

高頼は、刃こぼれして血糊がべったりとこびりついた太刀を鞘に納めると、深く、長い息を吐き出した。

「終わったな」

彼の周囲には、傷つき、疲労困憊しながらも、勝利の喜びに肩を震わせる家臣や国人衆が集まっていた。彼らの顔は煤すすと泥と血で汚れ、誰が代々仕える身分の高い武将で、誰が名もなき貧しい地侍な

のか、外見からは全く見分けがつかなかった。しかし、その場に在る全員の瞳が、高頼という一人の男を中心として、強固な信頼と絆で結ばれていることだけは、誰の目にも明白であった。

高頼は、廢墟となった本丸の石垣の一番高い場所に立ち、広場に集まった数千の兵たちを真っ直ぐに見下ろした。「皆の者、よく戦ってくれた！これで、因縁の観音寺城は俺たちのものだ。そして、この南近江も、今日この瞬間から俺たちのものだ！」割れんばかりの歓声が湧き上がり、空を揺るがした。兵たちは武器を天に突き上げ、喜びの涙を流して抱き合った。

高頼は右手を挙げて、その歓声を制した。「だが、勘違いするな。俺は、幕府からこの土地を任せられたわけではない。西軍の山名宗全に媚び諂って貰い受けたわけでもない。俺たちが流した血と汗の代償として、自らの力で奪い取ったのだ！」高頼の底知れぬ力強い声が、朝の冷たい空気を激しく震わせた。

「これより先、この近江の地において、室町幕府の法律は一切通用しない。将軍が発する御教書も、管領の命令も、すべてただの紙屑だ。俺に従い、共に血を流した者だけが、この土地を治める資格を持つ。俺が、俺自身の名において、お前たちの領地を保証する。実力ある者が土地を持ち、力無き者は去る。それが、これからの近江の唯一の掟だ！」その宣言は、まさに中世的秩序の完全なる否定であり、下の者が上の者を実力で打ち倒す下剋上の思想の、完全なる具現化であった。

これまでの守護大名は、幕府からの任命状や、幕府に代わって年貢を徴収する権利「守護請」などを唯一の根拠として領国を支配し、国人たちに命令を下していた。しかし高頼は、その権威の源泉を幕府という遠く存在から完全に切り離し、自らの圧倒的な武力と、在地勢力との直接的な契約関係

へと移行させたのである。

後日、高頼は本丸での宣言通り、自らの署名と花押のみを記した判物（領地安堵の文書）を、戦功の恩賞として国人たちに次々と分け与えた。そこには、慣例として幕府の年号は記されていても、幕府の権威を借りるような文言や、將軍への忠誠を誓うような文言は一切書かれていなかった。高頼は、自らを頂点とする独立した軍事政権を、この近江の地に樹立したのである。

この高頼の常識外れな行動は、京で泥沼の抗争を続けている東西両軍の首脳たちに、大きな衝撃と混乱を与えた。特に、西軍の総大将である山名宗全は、高頼が自分の指示に全く従わず、勝手に独自の領国支配を始めたことに激怒した。宗全は高頼のもとに高圧的な使者を送り、即座に西軍の指揮下に入るよう問責しようとした。

しかし、高頼は観音寺城の広間でその使者を鼻で笑い、一切の弁明をせずに追い返した。「宗全入道も、すっかり焼きが回ったな。己の権力欲で京を火の海にしておきながら、未だに他人の切り取った土地に口出しできると思っているとは。あの老いぼれには、世の中がどう変わったかが見えていないらしい」観音寺城に急ごしらえで建てられた仮御殿で、高頼は伊庭貞隆に向かって冷ややかに言い放った。

「御館様、そのような態度を取られては、これでは東軍の細川や京極のみならず、味方となるはずの西軍をも完全に敵に回すことになります。幕府そのものを敵とすることに……」貞隆の当然の懸念に対し、高頼は不敵な笑みを浮かべ、酒の入った杯を飲み干した。

「敵に回して何が悪い。俺は最初から、誰の下につくつもりもない。幕府などというものは、とうの

昔に死に体なのだ。今の將軍・義政公は、政を完全に放り出して銀閣の造営や芸術にうつつを抜き、都の民が飢えて鴨川に死体が溢れようがお構いなしだ。そんな腐りきった權威の象徴に、誰が頭を下げるものか。自力で飯を食えない犬に、飼い主の資格はない」高頼の瞳の奥には、冷徹で狂気じみた炎が宿っていた。

「近江の地は、俺が守る。京極が来ようが、細川が来ようが、山名が来ようが、すべてこの山と湖の底に沈めてやる。俺は、この戦乱の世を力のみで生き抜く。それこそが、新しい大名の在り方だ」高頼の言葉通り、彼はその後、南近江の統治体制を急速に、そして冷酷に固めていった。

観音寺城の修築を進め、より実戦的な城郭へと作り変えると同時に、城下に商人や職人呼び集め、関所を廃止して自由な取引を保護し、経済の活性化を図った。また、甲賀衆や伊賀の忍びとの連携をさらに深め、独自の諜報網を近江一円に張り巡らせた。彼の治世は、かつての守護の時代のような形式的な儀礼や格式を徹底的に排除し、極めて合理的で実用的なものであった。

農民たちからの税の取り立ても、これまでの守護の下で私腹を肥やしていた中間搾取を行う代官や悪徳な寺社を排除し、信頼できる国人たちを通じて直接管理する体制を整えた。これにより、民衆の負担は以前よりも軽減され、高頼に対する領民の支持は盤石なものとなっていった。かつて一揆を起こして六角家を追い出した国人たちも、今や高頼の強力なカリスマ性と実利的な統治の前に、心からの忠誠を誓うようになっていた。

しかし、高頼が推進する完全なる独立と、幕府の權威の徹底的な無視は、やがてさらなる巨大な嵐を呼び起こす運命にあった。

応仁の乱は、十年にも及ぶ不毛な戦いの末に、細川勝元と山名宗全という両巨頭が相次いで病死したこともあり、主だった大名たちが疲弊し、明確な勝敗がつかないまま自然消滅のように幕を閉じた。都は灰燼に帰し、幕府の権力は完全に地に墜ちたかに見えた。世の大名たちはそれぞれの領国へと帰り、自分たちの土地を守ることに専念し始めた。

だが、幕府の中枢には、衰退していく権威を己の力で再興させようと、異常なまでの執念を燃やす一人の若き理想主義者が育ちつつあった。足利義政の息子であり、次期将軍となる重い運命を背負った少年、足利義尚よしひさ（後の足利幕府第9代将軍）である。

極めて公家的な高い教養を持ちながらも、武家の棟梁としての極端なほどの自負心を持つ義尚にとって、京のすぐ隣である近江で幕府の法律を堂々と無視し、実力で領国を支配する六角高頼の存在は、決して許すことのできない「朝敵」であり、旧体制を根底から破壊する忌まわしき賊に他ならなかった。義尚の胸中には、高頼を討伐し、幕府の威光を再び天下に知らしめるという、若く危険な情熱が静かに燃え上がっていた。

観音寺城の天主台跡に立ち、夕陽に赤く染まる琵琶湖の湖面を見下ろしながら、高頼は吹き抜ける冷たい風の中に、新たな、そしてこれまで以上に巨大な戦いの気配を感じ取っていた。

「来るなら来い、幕府の威光とやら」高頼は、腰の太刀の柄を強く握りしめ、誰に言うともなく呟いた。

「俺が創り上げたこの近江の国、そう簡単に奪えると思うな。相手が将軍だろうが何だろうが、俺の領土を脅かす者は、すべて地獄へ送ってやる」

没落した名門の当主から、泥水に塗れた流浪の身を經て、權威を破壊し実力で領国を統治する「戦国大名」へと脱皮を遂げた六角高頼。彼の不屈の闘志と、常識に囚われない柔軟な思考は、やがて幕府の存亡を懸けた將軍・足利義尚自らの大軍勢、あの鉤の陣という歴史的死闘において、その真価を最大限に發揮することになる。

中世の旧体制は完全に破壊された。近江の湖水は、これから流れるであろうさらに多くの血によって、深く、そして鮮やかに染まっていく。高頼が掲げる「四つ目結」の旗は、時代の激しい突風を受けながら、戦国という新時代の到来を告げるように、夕闇の空に力強く翻っていた。

応仁の乱という未曾有の大戦火が京の都を焼き尽くし、およそ十年の長きにわたって日ノ本を二分した動乱は、旧来の權威と秩序を根本から揺るがした。かつて栄華を極めた花の都は見るともなく荒廢し、焼け落ちた御所の土塀や、瓦礫の山と化した公卿の邸宅の跡には、名も知れぬ雑草が無秩序に生い茂っていた。焦げた木材と古血の匂いが染み付いた風が吹き抜ける都の大路には、家を失った民草が亡霊のように彷徨い、その日を生き延びるための糧を求めて泥を漁る有様であった。名実ともに武家の棟梁たるべき室町幕府の威光は地に墜



ち、全国各地で下剋上の嵐が吹き荒れていた。

守護大名たちは、もはや幕府からの恩賞や庇護を当てにすることはできず、自らの腕力を頼りに領国の支配を強めようと躍起になっていた。

しかし一方で、国人や地侍といった在地勢力の台頭は著しく、彼らは古き權威を笠に着るだけの領主を冷ややかに見つめ、隙あらばその首を狙わんと牙を研いでいた。そんな激動の時代にあつて、近江国の南半国を支配する六角家当主・六角高頼は、いちはやく新たな支配のあり方を模索し、冷徹なる実行に移していた。

高頼は、幕府が保障する「守護」という肩書きの無力さを、一族の血塗られた歴史を通じて誰よりも深く理解していた。

戦乱の余波が収まらぬ中、三十代半ばを迎え、幾多の死線を潜り抜けた逞しい体躯を持つ高頼は、近江国における実質的な支配権を確固たるものにするため、冷徹かつ強硬な手段に出た。彼は、近江国内に点在する公家や寺社などの荘園本所領を次々と武力で接収し、自らの配下である国人衆に恩賞として惜しげもなく分け与えたのである。

ある日、京の有力な公家から派遣された使者が、高頼の押領に抗議するため観音寺城を訪れた。白粉を塗り、眉を引いた使者は、高頼の前に座るなり扇子を広げ、甲高い声で非難した。

「六角殿、朝廷の御料所や寺社領をほしのままに奪い取るとは、何たる狼藉。ただちに土地を返還し、上様と朝廷に謝罪なされよ。さもなれば、仏罰と神罰が下りましようぞ」

高頼は上座からその使者を冷やかな眼差しで見下ろし、ふっと鼻で笑った。

「仏罰だと？ 神罰だと？ 戦場で俺の頭上をかすめた矢の数は、貴殿らが詠んだ和歌の数より多い。俺を助けたのは神仏でも朝廷でもない。この近江で俺と共に槍を振るった家臣たちだ。俺は彼らに報いるために、この土地を切り取った。文句があるなら、筆ではなく槍を持って俺から奪い返しに来るがよい」

使者は高頼の底知れぬ凄みと、背後に控える猛々しい国人衆の殺気に圧倒され、這々の体で都へと逃げ帰った。

かつてであれば、朝廷や幕府の逆鱗に触れる大罪であった。しかし、兵火に焼かれ疲弊しきった都の貴族や寺社には、高頼の実力による支配を阻止する術など残されていなかった。彼らはひたすらに室町幕府へと泣きつき、六角の横暴を罰するよう訴え出るしかなかったのである。

この事態を誰よりも重く受け止め、激しい怒りを燃やしていたのが、室町幕府第九代将軍・足利義尚（ひさ）（1465～1489）であった。

「あの痴しれ者めが。天下の主たるこの余を差し置き、近江の地を私物化するなど言語道断である！」
京の室町第（足利将軍の居所）、華美な装飾が施された対面所で、義尚は手元の扇子を乱暴に畳に叩きつけた。乾いた破裂音が、静まり返った広間に鋭く響き渡る。二十歳に満たぬ若き将軍の顔には、公家めいた色白の滑らかな肌に不釣り合いなほどの、血走った険しい怒気が張り付いていた。

義尚は、父である第八代将軍・義政（よしまさ）が政治の煩わしさから逃避し、東山に籠もって庭園造りや茶の湯といった趣味に没頭していることに、腹の底から煮えくり返るような反発を抱いていた。衰退の一端を辿る幕府の権威を我が手で再興し、武家の棟梁としての絶対的な威光を再び天下に示さんとする

強烈な理想主義が、この若き將軍の胸の内業火のように燃え盛っていたのである。

「上様、六角高頼の振る舞いはもはや看過できぬ事態にござります。近江は都の喉元であり、日ノ本の大動脈たる琵琶湖を擁する要衝。これを無法者に押さえられたままでは、幕府の面目は丸潰れにござりまする」

「さよう。諸国の大名たちも、上様がいかに裁断を下されるか、固唾を飲んで見守っておりますぞ」居並ぶ幕臣たちが口々に同調する。しかし、彼らの声にはどこか保身の響きが混じっており、義尚の瞳に宿る狂気にも似た情熱とは温度差があった。義尚の冷やかで傲慢な視線が、彼らを睥睨した。「無論のことよ。六角高頼は、古き良き身分秩序を破壊する賊なり。天下の静謐を乱す朝敵として、余が自ら討ち果たしてくれよう。諸国の旧体制を乱す無法者どもに、室町幕府の力を見せつける絶好の機会ぞ」

義尚の言葉は、極めて公家的でありながらも高圧的な命令口調であった。自らを「天下の主」と任ずる強烈な自負が、その声音の端々から滲み出ている。義尚はただちに諸国の大名に号令をかけ、六角討伐のための大軍を編成しよう命じた。

細川、畠山、斯波といった管領家をはじめ、名だたる大名たちが將軍の權威を恐れ、あるいは若き將軍への点数稼ぎのために、重い腰を上げて軍勢を率い京へと集結した。その総勢、四万余。中世の軍役としては破格の大規模な討伐軍であった。

文明十九年（一四八七）秋。將軍・足利義尚は、金銀の細工が施された煌びやかな鎧兜に身を包み、数多の鮮やかな旗指物を秋晴れの空に翻しながら京を出陣した。先陣から後陣まで延々と続くその軍

列の豪華さ、威容たるや、見る者を圧倒するものであった。法螺貝の音が都の空気を震わせ、何千頭もの馬の蹄が大地を踏み鳴らす。沿道の民衆は土下座して一行を見送りながら、幕府の力が未だ健在であるかのような錯覚に陥った。

しかし、その威風堂々たる軍列を構成する諸大名たちの胸中は、決して士気高揚とは呼べない複雑で冷めたものであった。彼らの多くは十年にも及んだ応仁の乱で軍資金も兵糧も底をつき、疲弊しきっていた。自らの領国ですら国人一揆の火種がくすぶっているというのに、他国の領主の討伐などに大軍を割く余裕など、どこにもなかったのが実情である。

「上様の御熱心には恐れ入るが、たかが一国の守護を討つために、これほどの大軍を動かすとは狂気の沙汰よ」

「まったくだ。我らの兵糧がどれほど持つというのだ。早く片を付けて領国に戻らねば、足元をすくわれかねん」

大名たちは馬上にあって、周囲に聞こえぬよう小声で愚痴をこぼし合っていた。彼らは権威の回復に盲目的に固執する若き將軍の熱狂に逆らうことができず、ただ渋々従軍しているに過ぎなかった。外見こそ巨大で強大な討伐軍であったが、その内実は、互いの利害が複雑に絡み合い、結束力など皆無の砂上の楼閣であった。

一方、近江の南半国を治める六角高頼のもとには、幕府軍の大動員という凶報が、領内に張り巡らされた忍びの者たちによっていち早くもたらされていた。観音寺城の大広間には、息苦しいほどの重苦しい空気が立ち込めていた。

周圀の山々から吹き下ろす夜の冷たい秋風が、等間隔に立てられた松明の炎を不規則に揺らし、武将たちの顔に深い陰影を作っている。集まった六角家の重臣たちや国人衆の顔には、隠しきれない動揺と、死への恐怖がはつきりと浮かんでいた。

「上様が自ら陣頭に立たれ、諸大名を総動員して数万の軍勢がこちらに向かっているとのこと。先陣はすでに山城国を抜け、近江の国境に迫りつつあると報せが入りました。これに対し、我が六角軍が掻き集められる兵は、農民兵を合わせてもせいぜい数千。いかにこの観音寺城が天下の堅城とはいえ、これほどの圧倒的な兵力差では、ひとたまりもござらぬ……」

老臣の一人が、震える両手で膝を掴みながら報告した。広間がざわめき、誰もが絶望的な敗北を予感してうつむいた。かつて満綱の時代にこの城が国人一揆によって火の海となった記憶が、古参の家臣たちの脳裏にフラッシュバックしていた。

しかし、その絶望の淵にあつて、上座にどっかりと腰を下ろす六角高頼だけは、微動だにせず冷徹な眼差しで家臣たちを見据えていた。三十代半ばを迎えた高頼は、修羅場を潜り抜けてきた男特有の、研ぎ澄まされた刃のような雰囲気纏っていた。彼の瞳には、恐怖ではなく、獲物を待ち受ける猛禽類のような鋭い光が宿っている。

「静まれ」高頼の無駄を削ぎ落とした、野太く力強い声が、広間の喧騒をピタリと止めた。武家らしい重みのある口調が、家臣たちの浮き足立った心を大地に縫い止める。

「数万の軍勢、諸大名の総動員……。なるほど、京の若き公方様は、この六角高頼の首を獲るために、随分と大掛かりで華やかな舞台を用意してくださったものよ。道誉公がご存命であれば、さぞかし喜

んで参戦したであろうな」

高頼の口元に、ふてぶてしい笑みが浮かぶ。そのあまりの余裕の態度に、家臣たちは当惑の表情を浮かべた。

「殿！ 笑い事ではござりませぬぞ！ このままでは我が六角家は、かつての満綱公の時のように、再び滅亡の憂き目に遭いまする！」

「左様です！ 討って出るか、それとも城に籠もり徹底抗戦するか、一刻も早く御決断を！」

「満綱公の時と同じだと申すか？」高頼は家臣の言葉を鋭く遮った。その瞬間、彼の瞳に一瞬だけ、激しい怒りのような炎が宿った。

「馬鹿を申すな。我が祖父・満綱公と伯父・持綱公がこの観音寺城で自害に追い込まれたのは、敵の大軍に攻められたからではない。己を支えるべき国人や地侍たちの心を失い、身内に刃を向けられたからこそ滅びたのだ。あの時の六角家は、幕府の権威という幻影に寄りかかり、近江の土で血の汗を流す者たちを見下していた。共に戦うべき者たちを見捨てたからこそ、見捨てられたのだ。俺はその愚行を、決して繰り返さぬ」

高頼は立ち上がり、鎧の草摺を鳴らしながら、ゆっくりとした足取りで広間の中央へと進み出た。彼の放つ圧倒的な存在感が、広間の空気を支配する。

「だが、今は違う。俺は権威などという塵芥は、とうの昔に捨て去った。俺が信じるのは、共に戦場を駆け、共に泥をすすり、共に血を流してきたお前たちだ。お前たちと俺との間にあるのは、紙切れ一枚の命令書でもなければ、守護と家臣という古い主従の鎖でもない。確かな利害と、この近江を共

に守り抜くという戦友としての絆である」

高頼の情熱的な口調が、家臣たちの胸の奥に眠る武士としての誇りを激しく揺さぶった。彼は拳を固く握り締め、広間に響き渡る声で力強く宣言した。

「聞いて驚け。俺はこの観音寺城を捨てる」

「な……城を、捨てる、と申されますか！」

広間が再び、今度は先程とは比べ物にならないほどの騒然とした空気に包まれた。中世の武将にとつて、本拠地たる居城を戦わずして捨てるということは、無条件降伏か敗北を意味するに等しい。代々受け継がれてきた名族・六角氏の威信にも関わる、前代未聞の重大事であった。

「そうだ。あっさりと明け渡してやる。数万の敵をこの城で迎え撃てば、なるほど数ヶ月は持ち堪えるかもしれない。だが、最後は必ず兵糧攻めに遭って全滅するのみだ。公方様の狙いは、この城を落とし、我が首級を挙げて幕府の力を天下に誇示することにある。ならば、我々はその逆を突く。敵に立派な城を無傷で与え、我々は煙のように姿を消すのだ」

「姿を消すとは、いずこへ……？まさか、他国へ落ち延びると？」

「否。我らの往く先は、甲賀の山中よ」

高頼の口から飛び出したその地名に、家臣たちは思わず息を呑んだ。甲賀地方は、南近江の東南部に位置する、鬱蒼とした森と険しい岩肌に覆われた山岳地帯である。そこには「甲賀衆」と呼ばれる独立不羈の地侍たちが割拠していた。彼らは古くから「惣」と呼ばれる独自の自治組織を持ち、合議制によって意思を決定し、いかなる権力者にも完全に服属することはなかった。平地の武士が重んじ

る名乗り合いや一騎打ちといった作法を鼻で笑い、毒や火薬、奇襲や暗殺を駆使する、独自の戦術と強固な団結力を誇る異能の集団であった。

「俺はすでに甲賀の者たちと密かに話をつけてある。彼らは俺を、平地から来た『上の者』ではなく、共に幕府軍という外敵を追い払う『対等な戦友』として迎え入れてくれると約束した。公方様の華美で凶体のデカイ大軍は、平地での陣立てには向いていようが、あの獣道すら定かでない険しい山岳地帯に踏み込めば、ただの巨大なものになる。我々は地の利を完全に活かし、昼夜を問わぬ奇襲とゲリラ戦で敵の兵糧を奪い、精神を疲弊させる。勝つためには泥にまみれ、名誉も作法も捨てる。これが、俺の戦だ」

既成概念に全く囚われない高頼の柔軟かつ冷徹な決断に、家臣たちは言葉を失った。名門・佐々木一族の流れを汲む六角氏の当主が、土豪たちと共に暗い山中へ逃げ込み、夜盗のような戦法を取るというのだ。しかし、不思議と反論する者は一人もいなかった。高頼の瞳に宿る強烈な生への執着と、勝算への揺るぎない確信が、彼らの心を惹きつけてやまなかったからだ。かつて氏頼が「近江の土と民にこそ六角の根はある」と悟ったその精神が、今、高頼という風雲児の手によって、究極の実戦形態として結実しようとしていた。

「よいか、これはただの防衛戦ではない。古い世を終わらせ、真の実力がものを言う新しい世を創るための戦いである。幕府の虚飾に満ちた権威を、この近江の地で完全に打ち砕いてみせる。皆の者、俺に続け！」

「おおおおおっ！」



広間を揺るがすような雄叫びが上がった。かつての六角家を縛り付けていた名門の誇りや体面という見えない鎖は、高頼の放つ強烈な熱気によって完全に溶け落ち、一つの狂暴な意志を持つ新たな力へと生まれ変わろうとしていた。

数日後。将軍・足利義尚が率いる数万の幕府討伐軍が、威風堂々と近江国へと足を踏み入れた。彼らは六角軍が国境付近や観音寺城の周辺で激しい抵抗を試みるものと予想し、陣形を固めて慎重に行軍を進めていた。しかし、彼らの前に立ちはだかるはずの観音寺城は、不気味なほどに静まり返っていた。城を囲む山々からは鳥の鳴き声すら聞こえず、ただ秋の風が空虚に吹き抜けているだけであった。

「上様、斥候からの報告にござります。六角の兵の姿が一切見えませぬ。観音寺城の城門は大きく開け放たれており、米一粒、矢一本残さず、見事なまでにもぬけの殻にござります」報告を受けた義尚は、煌びやかな馬上で眉をひそめ、不快げに舌打ちをした。

「もぬけの殻じゃと？ 六角高頼め、余の数万の大軍を前にして恐れをなし、戦わずして逃亡したか。名族の誇りも武士の意地も何もない、腰抜けめが。やはり下劣な山賊の徒に成り下がったか」

義尚は鼻で笑い、心底からの軽蔑を顔に浮かべた。彼の理想とする武士の戦いとは、正々堂々と陣を構え、先祖の功名を名乗り上げてから刃を交えるという、中世の絵巻物にあるような華やかで秩序あるものであった。城を捨てて逃げ隠れするなど、武士の風上にも置けぬ卑怯未練な振る舞いである。としか思えなかった。

幕府軍は無血で観音寺城を接收し、将軍の馬印を城の天守に立てた。しかし、観音寺城は急峻な山城であり、数万もの大軍を長期にわたって駐屯させるにはあまりにも手狭であり、水の確保や補給の

面でも大きな難があった。なにより、目的は城を落とすことではなく、逃亡した高頼の首を挙げることである。

斥候を四方に放ち、高頼とその軍勢が南の甲賀の深い山中へ逃げ込んだことを知った義尚は、本陣を近江国の鈎まがり（現在の滋賀県栗東市）という地に移すことを決定した。鈎は東海道と中山道が交わる交通の要衝であり、広大な平野が広がっているため、数万の軍勢を展開し、京からの兵站を維持するのに都合が良かった。また、南方に連なる甲賀の山々を正面に見据える位置にあり、六角討伐の拠点としてこれ以上ない場所であると判断されたのである。

こうして、歴史に名高い「鈎の陣」が形成されることとなった。

鈎に陣を敷いた足利義尚の軍容は、まさに壯観の一言に尽きた。將軍の巨大な本陣の周囲には、細川ほそかわ政元まさもと（1466～1507）、畠山政長はたけやまさなが（1442～1493）といった有力大名たちがそれぞれの家紋を描いた陣屋を構え、無数の軍幕が平野の果てまで埋め尽くした。夜になれば無数の松明や篝火が焚かれ、まるで新たな都が近江の地に突如として出現したかのようであった。

義尚はこの陣中において、將軍としての絶対的な権威と「雅」を存分に誇示した。彼は戦場であるにもかかわらず、京の都から多数の公家や文化人、連歌師、茶人、さらには猿楽師までも呼び寄せたのである。本陣には立派な檜造りの御殿が仮設され、そこでは連日のように豪華な酒宴が開かれ、連歌の会や茶会、猿楽の催しが夜を徹して行われた。義尚自身も極めて優れた教養人であり、陣中にもありながらも自らの和歌を披露し、優雅な時間を楽しんでいた。

「いかがか。賊を討ち果たす泥臭い陣中にありながら、こうした雅を解する余裕を見せることこそ、

天下の主たる器というものよ。六角高頼などという山に這いつくばる猿どもには、一生理解できまい」
義尚は、美しい天目茶碗に立てられた香り高い抹茶を傾けながら、側近たちに向けて得意げに語った。諸大名たちも、若き將軍の機嫌を損ねまいと、顔には作り笑いを浮かべながら、この華やかで現実離れた「陣中文化」に付き合わざるを得なかった。しかし、彼らの本音は全く別のところにあった。自陣に戻れば、誰もが苦々しい顔で不満を爆発させていた。

「兵糧の消費が激しすぎる。ただでさえ戦続きで我らの領国は火の車だというのに、いつまでこのような無意味な陣中遊びに付き合わされるのだ」

「六角高頼を討つと息巻いていたが、あの険しい山に籠もった相手を引っ張り出す手立てもないではないか。このままでは、我々はいたずらに兵と金銭をすり減らすだけの泥沼よ」

陣のあちこちで、諸將の不満の火種が黒い煙を上げ始めていた。圧倒的な兵力を持ちながらも、明確な戦術目標を持たず、ただ権威を誇示するただけに駐留し続ける幕府軍は、その巨大さゆえに徐々に内側から腐敗し、疲弊の度合いを深めつつあった。

一方、その頃。鉤の華やかな陣営から遠く離れた、甲賀の深く暗い山中。六角高頼は、冷たく湿った岩肌を腰を下ろし、眼下の平野で煌々と輝く幕府軍の巨大な陣火を、氷のように冷徹な目で見下ろしていた。彼の周囲には、闇に完全に溶け込むような黒装束や、土の色に染まった粗末な野良着を纏った甲賀の地侍たちが、落ち葉一つ鳴らすことなく息を潜めて控えている。森の冷気が彼らの体を包んでいたが、その内側には獲物を狙う熱い殺気が満ちていた。

「随分と楽しそうに宴会を開いておるわ。風に乗って、酒の匂いや鼓の音がここまで届いてきそうだ。



あの明かりの数だけ、敵は無駄に兵糧を食らい、気を緩ませているということだ」

高頼の隣で、甲賀衆の頭目の一人が、喉の奥を鳴らすような低い声で言った。その顔は深い皺に覆われ、山での過酷な生活と幾多の殺し合いを物語る傷跡が刻まれていた。

「お頭、いつでもいけませんぜ。あの白粉を塗った公家張りの將軍様に、甲賀の夜の本当の恐ろしさを教えてやりましょうや」

高頼は口元を歪めて凶悪な笑みを浮かべ、頭目の肩を力強く叩いた。

「頼むぞ。公方様は、戦というものを儀式か、絵巻物の続きか何かと勘違いしておられる。実力のみがものを言う、泥と血に塗れた本物の戦を、そのお高くとまった鼻面に容赦なく叩きつけてやれ」

高頼の合図とともに、甲賀の山々から無数の黒い影が、一陣の夜風のように音もなく急斜面を滑り降りていった。彼らは生まれ育ったこの土地の利を完全に熟知しており、獣道すら存在しない険しい崖や、足を取られる泥濘ぬかるみを、まるで平地に敷かれた畳の上を歩くかのように迅速かつ無音で踏破していった。

その夜。鉤の陣は、深い眠りについていた。連日続く酒宴と連歌の会で疲れ果てた兵たちは、見張りの役目すら怠り、あちこちで高いびきをかき、だらしない寝姿を晒していた。かがり火も薪が尽きかけ、陣の輪郭は闇に溶け込もうとしていた。

突如として、その静寂は暴力的に破られた。

「火だ！火の手が上がったぞ！」

陣の東側で、突如として巨大な炎が夜空を焦がした。何者かが放った火矢が、油を染み込ませた軍

幕に次々と突き刺さったのである。驚き慌てて飛び起きた兵たちが目にしたのは、先程まで安息の場であった自陣が、猛烈な勢いで燃え盛る地獄の光景であった。

「敵襲！六角の奇襲だ！出会え、出会え！」

怒号が飛び交い、半裸の兵たちが慌てて槍を掴もうとする中、混乱に拍車をかけるように、今度は西側から耳をつんざくような轟音が響き渡った。爆竹や狼煙のろしに用いる火薬を使った、音による奇襲である。暗闇の中で、敵がどこから、どれほどの数で攻めてきているのか、幕府軍の誰にも全くわからなかった。

「うわあああつ！」

悲鳴が上がる。火の粉が舞い散る中、煙の中から黒い影が風のように現れては、寝惚け眼の幕府軍の兵士を次々と切り伏せ、あつという間に再び闇の中へと消えていく。甲賀衆の用いる武術は、平地の武士が教わるような作法に則った美しい剣術では決してなかった。低い姿勢から足元を薙ぎ払い、相手が倒れた隙に短刀で首筋や鎧の隙間といった急所を的確に突き刺す、徹底的に実戦と殺傷に特化した泥臭い暗殺術であった。

「落ち着け！陣形を立て直せ！狼狽えるな、敵は少数だ！」

諸将が声を枯らして馬に飛び乗り、指揮を執ろうとするが、極度のパニックに陥った数万の大軍は、もはや誰の統制も利かなくなっていた。恐怖のあまり味方同士で斬り合う同士討ちすら各所で発生し、陣中は怒号と悲鳴、そして燃え盛る炎が交錯する阿鼻叫喚の地獄絵図と化した。

義尚の寝所である豪華な御殿にも、その妻まじい喧騒は届いていた。側近たちが血相を変えて飛び

込んでくる。

「上様！六角の奇襲にござります！敵の数は不明、陣のあちこちで火の手が上がっており、兵たちは総崩れの状態にござります！」

「なんだと……！あの卑怯者どもめ、夜陰に乗じてこそこそ……ええい、出陣じゃ！鎧を持って！余が自ら討って出て、賊の首を刎ねてくれる！」

義尚は寝巻きのまま刀を掴み、血走った目で外へ飛び出そうとした。しかし、重臣の細川政元が身を挺してそれを必死に羽交い締めにし、引き留めた。

「上様、なりませぬ！闇夜での乱戦はいかほどの伏兵が潜んでいるやも知れず、將軍家の御身を危険に晒すのみ。ここは一時、後方の安全な陣へとお下がりください！」

「離せ、政元！余は天下の主ぞ！賊の夜襲などに背を向けて逃げ出すなど、武家の棟梁として末代までの恥辱であるわ！」

義尚は激しく抵抗し、政元を突き飛ばそうとしたが、結局は数人の側近たちに無理やり押し留められた。彼は屈辱に唇から血が出るほど嘔み締めながら、赤々と燃え盛る自陣の無惨な様をただ眺めることしかできなかった。彼の信じていた「圧倒的な権威と兵力」が、名もなき土豪たちのゲリラ戦の前に、いとも容易く蹂躪されていく様を見せつけられたのである。

夜が明ける頃には、甲賀衆はまるで最初から幻であったかのように、一人残らず山へと姿を消していた。残されたのは、黒焦げになった大量の軍幕と、数知れぬ味方の死体、焦げた肉の異臭、そして極限まで疲弊しきり、虚ろな目をした幕府軍の兵士たちだけであった。

これは、六角高頼が仕掛けた長く過酷なゲリラ戦の、ほんの幕開けに過ぎなかった。

その日を境に、幕府軍の陣中から「雅」という言葉は完全に消え去った。夜になれば、いつまたあの黒い影たちが山から下りてきて命を奪われるかわからないという底知れぬ恐怖が、兵士たちの心を冷たい毒のように蝕んでいった。見張りは神経をすり減らし、些細な風の音や木の葉の揺れにすら怯えて暗闇に向けて矢を放つ有様であった。寝不足と恐怖で、陣中の士気は地に落ちていた。

高頼の戦術は、単なる夜襲だけにとどまらなかった。彼は甲賀衆の機動力を極限まで駆使して、幕府軍の生命線である補給線を徹底的に破壊する作戦に出た。京から近江へと続く街道のあちこちの山林に伏兵を潜ませ、兵糧や武器を運ぶ荷駄隊を次々と襲撃したのである。荷車は崖下へ落とされ、米俵は奪われ、護衛の兵は容赦なく討たれた。

「また兵糧が届かなかつただと！このままでは数万の兵に飯を食わせることなど到底できぬぞ！」

諸將の陣屋では、毎日悲鳴にも似た怒号が飛び交うようになった。大軍であればあるほど、一日に消費する食糧は莫大な量になる。高頼は、幕府軍の最大の強みであるはずの「圧倒的な数」を、逆に彼らの首を真綿で絞める致命的な弱点へと変えてみせたのである。兵糧の配給が減り、飢えに苦しむ兵士たちの間では、逃亡者が後を絶たなくなった。

さらに高頼は、目に見えぬ心理戦をも巧妙に仕掛けた。甲賀衆に命じて、商人に変装させたり、捕らえさせた敵兵をわざと逃がしたりして、陣中に巧妙な偽の情報を流布させたのだ。

「細川殿が、裏で六角と内通しており、京へ引き上げる算段をつけているらしい」

「畠山殿の陣から、昨夜密かに六角への使者が出たそうだ。我々は見捨てられるぞ」

十年続いた応仁の乱を経験し、昨日の友は今日の敵という裏切りを嫌というほど見てきた大名たちは、互いに疑心暗鬼に陥りやすい心理状態にあった。そこを巧みに突いた流言飛語は、幕府軍の内部分裂を加速させ、深い亀裂を生じさせた。ただでさえ長引く戦で疲労困憊している諸将は、隣の陣にいる味方すら信じられなくなり、軍議の場でも互いに非難の応酬を繰り返し、刀の柄に手をかける寸前の事態まで引き起こした。

甲賀の山中から、高頼はこの崩壊していく幕府軍の状況をすべて掌握し、冷徹に計算していた。「見ろ、これが権威や体面だけで寄り集まった烏合の衆の末路だ。己の利害と保身しか考えぬ連中が、どれほどの兵力を誇ろうとも、真の結束がなければ最後は自らの重みで崩れ去る。満綱公の失敗から俺が学んだのは、まさにこのことだ」

高頼の傍らで、甲賀衆の若者が、パチパチと爆ぜる焚き火の火を木の枝で弄りながら言った。「高頼の旦那、あんたは大名なのに、ちっとも偉ぶらねえな。前に近江を治めてた守護様たちは、俺たち山の間人を、言葉の通じない獣みたいに汚いものとして見下してたつてのに」

「俺は守護様ではない。ただの生き残るための武将だ」

高頼は白い歯を見せて笑い飛ばし、持っていた瓢箪の酒をあおった。

「偉ぶって勝てるなら、いくらでも偉ぶってやるさ。だが、戦場で本当に頼りになるのは、京の都でもらった肩書きや、何百年続く家柄ではない。いざという時に、俺の背中を守り、隣で槍を突いてくれるお前たちだ。お前たちが己の命を懸けて戦ってくれるからこそ、俺はこうして生きている。俺とお前たちは、この近江という土地で共に生き抜き、共に笑うための対等な戦友だ」

その言葉に嘘偽りがないことを、甲賀の土豪たちは肌で感じ取っていた。高頼は彼らと同じ粟や稗の混じった飯を食い、同じ湿った土の上で寝て、誰よりも先頭に立って夜襲の指揮を執った。華やかな道誉の振る舞いに劣等感を抱きながらも、近江の土着勢力との地道な信頼関係を築き上げたかつての当主・六角氏頼の魂が、高頼の中でより強靱で実戦的な「戦国大名」の形をとって実を結んでいたのである。権力や恐怖ではなく、実利と心の底からの信頼で結ばれたこの強固な絆こそが、正規軍の圧倒的な物量に対抗しうる唯一にして最強の武器であった。

鉤の陣の膠着状態は、数ヶ月、いや年単位に及ぼうとしていた。

「將軍・足利義尚の焦燥と絶望は、すでに極限に達していた。当初の計画では、数万の軍勢で近江を蹂躪し、瞬く間に六角高頼の首を京へ持ち帰り、將軍の威光を天下に知らしめるはずであった。それがどうだ。目に見えぬ敵に夜昼なく翻弄され、兵糧は尽きかけ、諸大名は「領国の乱れを鎮めるため」と称して、理由をつけては次々と陣を無断で離脱し始めている。幕府の權威を回復するどころか、逆にその無力さと醜態を天下に曝け出す結果となってしまっていた。

「なぜだ……なぜ、あの山猿のような賊を討てぬ。余は天下の主であるぞ。正しい秩序を取り戻し、美しい世を創るための戦いが、なぜこれほどまでに苦しく、惨めなのだ……」

義尚の顔から、出陣の時の若々しい覇気は完全に失われていた。頬は不健康にこげ、目は落ち窪み、公家のような白い肌は生氣のない土色に変色していた。連日の極度の緊張、睡眠不足、そして思い通りにならない戦況への苛立ちが、彼の心身を内側から激しく蝕^{むし}んでいたのである。彼は夜な夜なうなされ、自陣が燃える幻覚を見ては叫び声を上げた。

「上様、お顔の色がひどく優れませぬ。どうかお労りくださりませ。一度、京へ戻られてご静養を……」

側近の言葉にも、義尚は虚ろな視線を返すだけであった。彼は生真面目な理想主義者であった。室町幕府という美しい秩序の形を純粹に信じ、それを自らの手で完成させようと身を焦がして燃えていた。しかし、彼が直面した現実には、血と泥にまみれ、權威など歯牙しがにもかけない地方の土豪たちの剥き出しの暴力であり、生きるか死ぬかの生存競争であった。義尚の繊細な精神は、そのあまりにも巨大なギャップに耐えきれず、粉々に碎け散ろうとしていた。

長享三年（一四八九）の春。近江の山々に遅い春の訪れを告げる梅の花が咲き始め、冷たい風の中に微かな暖かさが混じり始めた頃。陣中において、義尚は突如として倒れた。過労と極度の精神的重圧による、重篤な病の発症であった。

「上様！上様！」

陣屋の中はパニックに陥った。京から急ぎ高名な医師が呼ばれ、高僧たちによる加持祈祷が昼夜を問わず行われたが、義尚の病状は悪化の一途を辿るばかりであった。高熱にうなされ、息も絶え絶えになりながら、義尚はうわ言のように繰り返した。

「高頼を……六角高頼を討て……。天下の、秩序を……。我らが幕府の威光を……」

彼が最期の瞬間まで掴み取ろうと手を伸ばしたのは、もはや現実には存在しない、中世の旧体制という儂はかない幻影であった。そして同年三月、足利義尚は二十五歳というあまりにも短い生涯を、近江の鉤の陣中において無念のうちに閉じたのである。將軍の死顔には、深い無念と絶望が刻まれていた。

將軍陣没の報は、またたく間に全軍へと知れ渡った。

「上様がお隠れになられた！もはやこの地に留まる理由はない！撤退だ、一刻も早く京へ戻れ！」
諸大名たちは、待つてましたとばかりに一斉に陣払いを始めた。若き將軍の死を悲しみ、弔う余裕など誰の心にもなかった。彼らは我先にと荷をまとめ、六角軍の追撃を恐れて逃げるように京へと引き上げていった。数万を誇った幕府の大軍は、精神的支柱であった指揮官を失ったことで完全に瓦解し、まるで蜘蛛の子を散らすように呆気なく消滅したのである。

甲賀の山中から、高頼はその光景を静かに見下ろしていた。夜明けの薄明かりが、土煙を上げて撤退していく幕府軍の長い列を照らし出している。鈎の地には、主を失った無数の陣跡と、打ち捨てられた武器やゴミの山だけが、虚しく残されていた。

「終わったな」

高頼の横で、甲賀衆の頭目が深く息を吐き出しながら、安堵と達成感の入り混じった声で言った。

「ああ。勝ったのだ、我々は。この近江の土が、都の権威に打ち勝ったのだ」高頼の声は、驚くほど穏やかであった。歓喜の雄叫びを上げるわけでもなく、ただ静かに、勝利という歴史的な事実を噛み締めていた。

数万の正規軍を相手に、数千の兵と地の利、そして強固な意志のみで立ち向かった過酷な戦い。高頼は、幕府という中世の最高権威を、己の実力と領民との絆によって完全に打ち砕いたのである。これは単なる一地方の防衛戦ではない。権威に頼らず、己の力と土地に根ざした絆のみで領国を統治するという、「戦国大名」という新たな支配者の形を、天下に知らしめた歴史的な勝利であった。

「さあ、山を下りるぞ。俺たちの土地、近江へ帰ろう」

高頼の力強い号令とともに、六角軍と甲賀衆は割れんばかりの歓声を上げながら山を下り始めた。長きにわたる山中での過酷な生活で彼らの姿は泥にまみれ、無精髭が伸び放題であったが、その足取りは羽のように軽く、その顔には新しい時代を自らの手で切り拓いた者たちだけが持つ、誇り高い輝きが満ちていた。

焼け野原となった近江の平野に、春の温かい風が吹き抜ける。かつて六角家を縛り付けていた名門の重圧や、守護という脆い虚構は、この風と共に完全に吹き飛んでいた。

六角高頼。彼は、京極道誉のような華やかな中央での政治劇を好まなかった。彼は祖父・満綱の悲劇を忘れることなく、近江の土と民に寄り添い、共に泥にまみれ、血を流すことを選んだ。そして、足利義尚という旧時代最後の理想主義者を打ち破ることで、六角家を名実ともに自立した独立国家の主へと押し上げたのである。

彼らの目の前には、広大な琵琶湖の湖面が広がっていた。朝日を浴びて眩まぶしくきらめくその水面は、まるで新しい時代の幕開けを祝福しているかのようであった。その湖水を染めるように、六角家の「四つ目結い」の旗が、再び近江の空高く、力強く掲げられた。それはもはや、鎌倉から続く古い御家人の旗ではない。己の力のみで生き抜くことを決意した、新時代の覇者たる戦国大名の誇り高き旗であった。

近江の土に蒔いた「下剋上」と「実力主義」の種は、やがて日本全土を覆い尽くす戦国という血塗られた大樹へと成長していくこととなる。その歴史の巨大なうねりの中心に、不屈の風雲児・六角高頼の確かな足跡が、決して消えることのない深い刻印として残されたのである。



第五章 定頼の黄金期…湖国の繁栄と静かな衰退

永正十七年（1520）。父・高頼が病に伏すと、定頼は二十歳そこそこで家督を継いだ。観音寺城の石垣に立ち、湖面を渡る風を受けながら、彼は静かに呟いた。「近江を、守らねばならぬ」六角家は近江守護として名門であったが、決して盤石ではない。北には浅井氏、東には美濃の斎藤氏、西には京極氏の残党、南には伊賀・伊勢の国衆。そして京の幕府は衰え、將軍の威光は地に落ちつつあった。若き当主は、まず国内の安定を図った。国人衆を一人ひとり観音寺城に呼び寄せ、膝を突き合わせて語り合う。「六角は決して驕らぬ。共に近江を治めよう」その誠実さは、やがて国中に広く知られるようになる。

定頼の名を天下に轟かせたのは、細川晴元（1514～1563）との同盟である。京は細川・三好・大内らの争いで荒れ果て、室町幕府第十二代將軍・足利義晴（1511～1550）は近江へ逃れてきた。義晴は観音寺城に迎えられ、定頼は將軍の庇護者として立つ。このとき、京の公家たちは六角定頼をこう呼んだ。

「天下の副將軍」將軍家の威光を支え、京の政務を代行し、近江の兵を率いて諸勢力を調停する。定

頼は武勇だけでなく、政治の才にも優れていた。ある夜、義晴は定頼に語った。「近江に来て、ようやく心が休まった。そなたの治める国は、まことに穏やかだ」定頼は静かに頭を下げた。

「將軍家あつての六角。私はただ、近江を守り、天下の乱を鎮めたいだけにございます」その言葉は偽りではなかった。彼は將軍家の權威を利用して勢力を広げることができたが、決してそれをしなかった。あくまで「守護」としての節度を保ち、近江の安寧を第一としたのである。

しかし、湖国の平穩は長く続かない。北近江の浅井亮政（すけまさ？1542）が勢力を拡大し、六角家に牙を剥いた。天文四年（1535）。両軍は琵琶湖畔で激突した。近江国はなお戦乱の余燼冷えやらず、南北の境目には絶えず緊張が走っていた。

この頃、南近江を領する六角定頼は、將軍義晴を奉じて畿内の軍政を掌握し、その勢威は近江一国を覆うほどであった。

一方、北近江の浅井亮政は、京極氏の衰退に乗じて国人を糾合し、湖北の支配を固めつつあり、両者の勢力は犬上・愛知川流域を境として鋭く対立していた。

同年冬、六角方の国人が浅井領へ侵入し、境目の村々に放火・掠奪が相次いだ。亮政はこれを看過せず、ただちに国人衆を召集し、愛知川北岸に陣を敷いて六角勢の動向をうかがった。

六角方もまた、永原・和田・蒲生らの諸隊を率いて南岸に布陣し、両軍は川を隔てて対峙することとなった。夜明け、川霧深く、両軍の旗指物すら判然とせぬ中、六角勢の先鋒が浅瀬を選んで北岸へ進んだ。

浅井方はこれを迎え撃ち、鉄砲・弓をもって応戦したため、六角勢の先頭は大いに乱れた。しかし

六角の馬廻衆は動揺せず、盾を掲げて前進し、後続の槍隊がこれに続いた。

川中において両軍は激しく衝突し、槍の応酬は長く続いた。

浅井方は地の利を得て奮戦し、六角勢を押し返すところもあったが、六角本隊が側面より進み出ると、戦況は一時浅井方に不利となった。亮政は自ら馬を進めてこれを支え、国人衆を督励して陣形を立て直したため、六角勢もまた深追いを控え、川中にて膠着するに至った。

やがて六角方は退き太鼓を鳴らし、南岸へ兵を引いた。

浅井方も追撃を行わず、境目の防備を固めるにとどめた。

この日の戦いは、いずれの軍も決定的な勝敗を得るには至らなかったが、浅井方が境目を守り抜いたことは明らかであった。

戦は激烈を極めたが、定頼はあくまで「討ち滅ぼす」ことを望まなかった。彼は浅井氏の背後にある国衆の不満を読み取り、和睦の道を探る。やがて、浅井氏は六角家に臣従する形で和議が成立した。この柔軟な政治判断こそ、定頼の真骨頂であった。

「六角は、強くあらねばならぬ。だが、強さとは何だ。恐れられることか、敬われることか」定頼は悩み続けた。彼は武断の道を嫌い、民と国人の信頼を重んじた。だが、その優しさが時に弱さと映ることもあった。

天文二十年（1551）。定頼は病を得て床に伏す。観音寺城の天守から見える湖は、いつもより静かだった。嫡子・義賢が枕元に座る。「父上、六角はどうあるべきでしょうか」

定頼はゆっくりと目を開け、息子を見つめた。

「義賢よ……六角は、民のためにある。武威を誇るだけの家ではない。近江を守り、育て、將軍家を支える。それが六角の道だ」

義賢は深く頷いた。だが、父の理想を守ることが、どれほど困難であるかを彼はまだ知らなかった。やがて定頼は静かに息を引き取る。享年56歳。その死は近江中に深い悲しみを呼び、国人衆はこぞつて弔いの使者を送った。

六角定頼の治世は、戦国時代にあつて異例の「安定」をもたらした。彼は戦を避け、調停を重んじ、將軍家を支え、近江を豊かにした。その政治は後に「六角氏式目」として結実し、地域自治の先駆けとも言われる。しかし、歴史の激流は一つの場所に留まることを決して許さない。定頼が築き上げた圧倒的な栄華も、やがて忍び寄る時代の新たなうねりによって飲み込まれていく運命にあつた。

終章 観音寺城の落城

近江の湖面を渡る風は、秋の気配を孕みながらも、どこかざわついていた。永禄十一年（1568）九月。南近江の覇者として数百年の歴史を刻んだ六角家は、今まさに滅びの瀬戸際に立たされていた。観音寺城の石垣に立つ六角義賢は、遠く西の空を睨んだ。雲の切れ間から差し込む光は、まるで湖国の命運を照らす最後の灯火のようであった。

「……信長め。とうとうここまで押し寄せてきたか」義賢の声は低く、しかし震えてはいなかった。その背後に控える嫡子・義治が、父の横顔を見つめながら口を開く。「父上。まだ兵は残っております。観音寺城は堅固。籠城すれば、信長とて容易には攻め落とせませぬ」

義賢はゆっくりと首を振った。「義治よ。信長は、もはやただの尾張の一大名ではない。天下を睨む男だ。あやつの勢いは、もはや常道では測れぬ」義治は唇を噛みしめた。

革新的な軍制、鉄砲の大量運用、そして何よりも恐るべき決断力。六角家の伝統的な支配構造は、信長の前ではあまりに脆かった。

その頃、観音寺城の麓では、織田軍が着々と包囲の輪を狭めていた。

「殿。六角勢、未だ抵抗を続けております」柴田勝家が報告すると、信長は馬上で鼻を鳴らした。

「ふん。六角など、もはや枯れ木よ。だが、最後の意地というものは侮れぬ。油断はするな」信長の眼光は鋭く、湖面の光を反射してざらりと輝いた。

「観音寺城は堅城にござりますが……」

「勝家。城が堅いかどうかは問題ではない。六角に、もはや戦う心が残っておるかどうかよ」信長の言葉に、勝家は深く頷いた。

信長は続ける。

「六角義賢は、武勇の人ではない。だが、近江を治めた才覚は侮れぬ。追い詰められた獣ほど厄介なものはない。——だが、ここで六角を討たねば、天下は見えぬ」信長の声は、冷たく、そして確信に満ちていた。

観音寺城本丸。義賢、義治を中心に、家臣たちが集まっていた。

「殿。ここは一戦交えるべきにございます。六角の名を、易々と織田に踏みにじらせるわけには参りませぬ」老臣・平井定武が声を荒げる。彼は六角家の忠臣として知られ、義賢の代になってもなお六角家を支え続けてきた。

しかし、義賢は静かに首を振った。「定武。おぬしの忠義、痛み入る。だが、六角家はもはや戦で勝てる力を持たぬ」

「しかし——！」

「わしは、六角の名を残したいのだ。無謀な戦で滅びるのではなく、未来へと繋ぐ形でな」義治が父

の言葉に目を見開いた。

「父上……まさか、落城を……?」

「義治よ。六角家は、ここで終わるわけではない。わしらが生きている限り、六角の血脈は続く。信長に屈したとて、六角の魂まで奪われるわけではない」家臣たちは沈黙した。義賢の言葉は、敗北を認めるものではあったが、同時に六角家の誇りを守るための決断でもあった。

夜明け前、観音寺城の周囲に火の手が上がった。織田軍が総攻撃を開始したのである。

「父上！敵勢、北の郭を突破しました！」義治が駆け込む。義賢は静かに立ち上がり、甲冑を身に着けた。

「義治。おぬしは城を出よ。六角の名を継ぐのは、おぬしだ」

「父上を置いて逃げよと……? そんなこと、できませんぬ！」

「六角の未来は、おぬしの肩にかかっておる。わしは、この城と共に六角の歴史を閉じる。だが、おぬしは六角の明日を開くのだ」義治は涙をこらえ、深く頭を下げた。

「……必ずや、六角の名を絶やしません」義賢は微笑んだ。

「それでよい」

観音寺城の本丸に、織田軍の兵が雪崩れ込む。義賢はわずかな近習とともに槍を構えた。

「六角義賢、ここにあり！織田の者ども、覚悟せよ！」老いたとはいえ、義賢の槍さばきは見事であった。次々と織田兵が倒れていく。しかし、多勢に無勢。やがて義賢の身体に深い傷が刻まれ、膝を叩いた。

そのとき、織田軍の武将が声を上げた。「六角義賢殿―信長公は、そなたの武勇と才覚を惜しんでおられる！降伏なされよ！」義賢は血に濡れた槍を支えながら、静かに笑った。

「信長よ……天下を取るがよい。だが、六角の魂までは奪えぬぞ」そう言い残し、義賢は天を仰いだ。観音寺城の天守に朝日が差し込み、義賢の身体を照らした。六角義賢、ここに果てる。

その頃、義治はわずかな供を連れ、観音寺城を脱出していた。背後では、城が炎に包まれ、六角家の歴史が終わりを告げていた。

「父上……必ずや、六角の名を再び世に示してみせる」義治の目には、涙ではなく、強い決意が宿っていた。

落城後、信長は観音寺城の本丸跡に立ち、焼け落ちた城を見渡した。「これで近江はわしのものよ。だが……六角義賢、見事な最期であった」信長はしばし沈黙し、湖を見下ろした。

「天下を取るとは、かくも多くの血を必要とするものか……」その呟きは、誰にも聞こえなかった。こうして、南近江を支配した六角一族は、観音寺城の落城とともに歴史の表舞台から姿を消した。だが、義治は生き延び、六角家の血脈は密かに続いていく。湖国の風は、今日も静かに吹いている。六角家の栄華と滅亡を知る者は少なくなったが、その魂は、近江の山々と湖に、今もなお息づいている。

観音寺城が炎に包まれたあの夜から、義治は幾つもの峠を越え、山中を彷徨うようにして南近江を離れた。振り返れば、幼き日より見上げてきた観音寺山が、遠く霞んで見える。六角の城は失われた。だが、胸の奥で燃えるものは、まだ消えてはいなかった。

「父上……六角の名は、必ずや再び湖国に戻す」義治は眩き、拳を固く握った。彼の周囲には、わずかに数名の旧臣が寄り添っていた。皆、疲れ切った顔をしていたが、その目には義治と同じ光が宿っていた。

「若殿。六角は滅びませぬ。我らが生きている限り、六角の旗は再び翻りましょう」老臣の言葉に、義治は静かに頷いた。

やがて一行は、甲賀の山里へと身を寄せた。そこには六角家に恩義を感じる土豪や忍びの者たちが密かに集まり、義治を迎え入れた。「ここから始めればよい。六角は城を失ったが、民の心までは失っておらぬ」義治は深く息を吸い込み、夜空を見上げた。星々は静かに瞬き、まるで六角の未来を照らす灯火のようであった。

観音寺城は落ちた。だが、六角の物語は終わらない。義治の胸に宿る炎は、父・義賢が託した最後の灯火であり、湖国の歴史に刻まれた名門の誇りそのものであった。

六角一族の長き興亡は、ここに幕を閉じる。しかし義治の胸に宿った火は、まだ消えてはいなかった。滅びの美学を背負い、彼は静かに山の闇へと消えていった。

観音寺城は無数の家臣団の屋敷によって囲まれている。その家臣団が協力一致して城を守ろうとする時には、無比の堅城ぶりを発揮するが、彼らの心が離散し、或いは相互に反目し合っているならば、逆に收拾し難い動乱と混乱を招き城全体としての守備力は支離滅裂となってしまう。

観音寺城はその外的防備力においては驚嘆すべき体制を整えていたが、残念ながら、城主六角氏は、その末期に凡庸又は幼弱の城主がつづいた。勇ある城主は知に欠け、知あるものは勇に欠けた。

家臣団は互いに権勢をきそい、反目し合い、策謀と裏切りとが相ついたのである。

標高432・9^{トイ}、南北に伸びる織山の山上に築かれた。南腹の斜面に曲輪を展開、家臣や国人領主の屋敷を配した。総石垣で、安土城以前の中世城郭においては特異な点とされる。天文年間（1532～1555）には城下町・石寺も置かれ、楽市が行われていた。周辺は琵琶湖や大中の湖、美濃から京都へ至る東山道、長光寺集落から伊勢へ抜ける八風街道があり、それらを管制できる要衝に位置する。

観音寺城には数多くの支城があるのが特徴の一つである。

・目加田城・箕作城・和田山城・垣見城・小川城・佐生城・山路城
 ・新村城・伊庭城・木村城・浅小井城・金剛寺城・長光寺城。

城郭、出城としての役割を果たした城もあれば、居館程度の城など様々な支城があったと推定される。

エピローグ 湖水は流転する

琵琶湖の湖面を撫でる風は、いつの時代も変わらずに波を立て、そして岸辺で静かに碎け散る。足利將軍の親征という未曾有の危機を甲賀の山中で退け、「鈎の陣」という大勝をもって近江に独立王国を打ち立てた六角高頼。彼は幕府という古き權威の呪縛を完全に断ち切り、実力のみがものを言う新たな時代の扉を抉じ開けた。しかし、どれほどの猛将であっても、老いという自然の摂理から逃れることはできない。

長きにわたる戦乱を駆け抜け、六角の家を没落の淵から救い上げた風雲児は、やがて静かにその生涯を閉じた。彼は近江の土と民を深く愛し、權威に頼らずに国人衆と対等な絆を結ぶことで強靱な領国を築き上げた。高頼が息を引き取った時、彼の眼差しが向いていたのは、都の華やかな喧騒ではなく、泥に塗れて共に戦った近江の広大な大地であったに違いない。



解 説

六角氏の支配地域（郡単位）

◆中核領域（鎌倉～室町・戦国期を通じて一貫）—六角氏の家臣団が集中し、守護代・郡守護使が置かれた最重要地域。

蒲生郡 六角氏の本拠（小脇館→観音寺城）。馬淵氏など主要家臣団が集中。

神崎郡 家臣団の分布が多く、六角氏の支配が強固。

愛知郡 守護代・郡守護使の支配が及んだ地域。家臣団が多い。

この三郡が「六角氏の領国の核」であり、六角氏の政治・軍事・経済の中心。

◆実効支配が及んだ周辺領域（室町後期～戦国期）

野洲郡 観音寺城の西側。六角氏の勢力圏として機能。

甲賀郡 甲賀衆との協力・対立を通じて影響力を保持。

栗太郡（大津周辺） 比叡山の勢力が強く、完全支配ではないが一定の影響力。

登場人物

★六角 泰綱（やすつな）（1213~1276）佐々木信綱の三男。六角氏を称し、佐々木氏の嫡流を継いで近江守護となる。享年64歳。

★六角 頼綱（よりつな）（1242~1310）六角泰綱の子。執権北条時頼の邸で元服し、のちに鎌倉幕府に仕え、その後近江守護となる。享年69歳。

★六角 氏頼（うじより）（1326~1370）六角時信の子。足利尊氏に従

い、近江守護となる。享年45歳。

★六角 満綱（みつつな）（?~1445）六角満高の子。近江守護。家督を嫡男 持綱に譲る。

★六角 久頼（ひさより）（?~1456）六角光綱の四男。1445年に幕府の命により還俗し、近江守護となる。京極持清の支援を受けて兄時綱を滅ぼすも、のちに持清と対立。

★六角 高頼（たかより）（?~1520）六角久頼の子。南近江の守護大名。応仁の乱では西軍につき、東軍に付いた京極氏と戦う。その後、公家や寺社領を横領したため、幕府の追討を受ける。高頼の娘は、十一代将軍 足利義澄の後妻となる。

★六角 定頼（さだより）（1495~1552）六角高頼の二男。南近江の守護大名。はじめ出家していたが、兄が亡くなったため還俗して家督を継ぐ。享年57歳。

★六角 義賢（よしかね）（1521~1598）六角定頼の長男。足利義晴・義輝らを擁して三好氏と戦う。1557年に家督を義治にゆずり、出家して承禎と号するが、実権は握り続けた。六角氏式目を制定する。享年78歳。

★六角 義治（よしはる）（1545~1612）第一六代当主 享年67歳。

★佐々木氏信（うじのぶ）（1220~1295）鎌倉中期の武将・御家人。佐々木氏支流京極氏の始祖。享年75歳

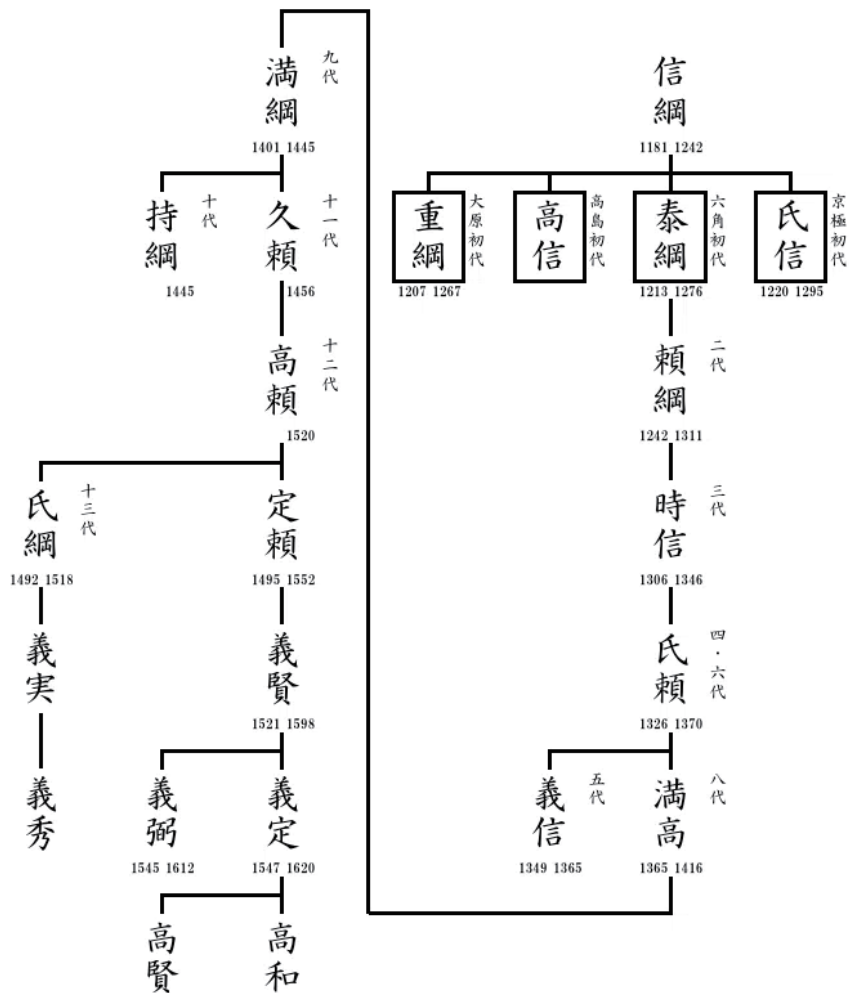
★京極 道誉（きょうごく どうよ）（1296~1373）後醍醐天皇の建武の新政から尊氏と共に離れ、尊氏の開いた室町幕府において政所執事や六カ国の守護を兼ねた。享年77歳

★京極持清（もちきよ）（1407~1470）六角氏と京極氏の勢力均衡が大きく揺らいだ転換点に立つ人物。六角高頼の宿敵。享年63歳。

室町幕府	将軍一覧	在位
初代	足利尊氏（たかうじ）	1338年～1358年
二代	足利義詮（よしあきら）	1358年～1367年
三代	足利義満（よしみつ）	1368年～1394年
四代	足利義持（よしもち）	1394年～1423年
五代	足利義量（よしかず）	1423年～1425年
六代	足利義教（よしのり）	1429年～1441
七代	足利義勝（よしかつ）	1442年～1443年
八代	足利義政（よしまさ）	1449年～1473年
九代	足利義尚（よしひさ）	1473年～1489年
十代	足利義材（よしき）	1490年～1493年
十一代	足利義澄（よしずみ）	1494年～1508年
十二代	足利義種（よしたね）	(1508年-1521年、1536年-1546年)
十三代	足利義晴（よしはる）	1521年～1546年
十四代	足利義輝（よしてる）	1546年～1565年
十五代	足利義栄（よしひで）	1568年～1568年
十六代	足利義昭（よしあき）	1568年～1573年

資料

- 近江蒲生郡教育会編『近江蒲生郡志』近江蒲生郡教育会 1926
 永源寺文書研究会編『永源寺文書』永源寺 1969
 池田家文書研究会編『池田文書』滋賀県教育委員会 1975
 滋賀県史編さん委員会編『滋賀県史 各説編 中世』滋賀県 1985
 佐々木六角氏の基礎研究』村井祐樹 2012
 東京堂出版編『戦国遺文 佐々木六角氏編』東京堂出版 2016



著者 清水^{しゅうご}修吾

〒526-0242 滋賀県長浜市三田町513

1948年生れ 1970年同志社大学卒業

1970~2008年 高校教諭

2008~2025年 滋賀県調理短期大学校講師

URL <https://mitamura-history.net/>

Mail shimizu513@zb.wakwak.com

TEL0749-74-2998

著者はこれまで『三田村一族の興亡—秀吉も一目置いた湖北の武士団』を著し、北近江の中世武士団の実像を描いてきた。

本書はその続編ともいえる試みで、舞台を南近江へ移し、六角氏の興亡を通して近江全体の中世史を立体的に捉え、地域史と中世史を架橋し、一次史料と物語性を両立させた作品。

戦国六角記 湖国を揺るがした名門一族

2026年●月●日 初版発行

著者 清水修吾

印刷製本 プイツーソリューション